
リリカルチート物語

抹茶ミルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルチート物語

【NZコード】

N7269T

【作者名】

抹茶ミルク

【あらすじ】

つり橋から落っこちて死んだと思ったら生きてて知らない場所にいた。

『程度の能力』があつて東方世界かと思ったら違う世界でした。チートな主人公が好き勝手やりたい放題するだけの話です。

プロローグ

あ、死んだ……。

そう確信して俺は目を閉じた。

身体全体に当たる風がとても強くて瞼を下ろすのも大変だつたけど、それ以上に目を開けたままなのは怖かった。

だけど……いつまで経っても思っていた衝撃は襲つてこなかつた。

それどころか、先程まで感じていた風も感じない。そして数瞬、身体の下に地面の感触があつた。恐る恐る目を開けてみる。

「…………は？」

思わず惚けた声を上げてしまつた。

「え……なんで？」

俺は地面にうつ伏せになつていた。

あり得ない。

だって、俺はさつきまで

”落ちていた”んだから。

今日、俺は家族で旅行に来ていた。
紅葉で有名な山に紅葉狩り。

インドア派で大して興味も無く親に言われるまま着いてきただけなのだが、なかなかに見ごたえがあった。

山を歩き、紅葉を見る。

それだけなら普通に何万人もの人が行う普通の旅行なのだが……俺はどうやら嫌な意味で”特別”になってしまったらしい。紅葉狩りのコースにある全長一〇〇メートルはあるうかという吊橋。

インドア派である俺はここまで来ると体力を消耗し、一緒にいる家族から大分離れてしまっていた。

吊橋の丁度真ん中辺りに俺が辿り着いたときには皆はもう橋を渡りきっていた。

橋には俺一人。別に高所恐怖症ではないが、これだけ高く、さらに細い端の上では若干恐怖を感じ、急いで渡ろうと足を速めたとき……なんだか上手くバランスが取れなくなつた。

後ろを見るとロープが切れ橋が落ちていく光景が随分とスローになつて目に映る。

勿論半分以上ある橋を落ちる前に渡りきることなど出来ず、ほとんど動くことも出来ない間に、俺は空中へ放り出された。

「で、気付けばこうなつていた……と」

俺は立ち上がり体の無事を確認した。

どにも怪我はしていない。

自身の無事を確認するとどうもない安堵感と先程の恐怖が襲つてきた。

「うおおおおおおおつー。」

叫ぶ。

「よつしやああああああーー。」

絶対死んだと思った。
でも、まだ俺は生きている。

「はあー……良かった……マジで良かった」

言しながら拳を握ると、ちゃんと感覚がある。

「ホント生きてるよ。元気でも……何でだ? つーかここ何処だ?」

落り着いてきたところで頭の中は疑問だらけになる。
普通あの状況で助かるはずがない。もし奇跡的に生きていたとしても無傷なんてことはあり得ないはずだ。

とつあえず俺が落ちる前にいたはずの上を見上げる。

「…………橋がない」

いや、それどころか先程までいた紅葉の綺麗な山ですらない。
山のよつこ傾斜になつてないし、見渡す限り葉が緑の木々が続いている。

森……あるいはジャングルと言つた方がしっくりくる景色だつた。こんな場所に見覚えはないし……何よりどうして橋から落ちた俺が無事で、しかもこんな所にいるのか。

「なんだよ、この状況……くっそ」

一人悪態を吐く。

そりゃあ、インドア派な俺は一次創作も好きだし、その中のジャンルであるオリ主物なんか読みながら俺もそんな世界行きたいとか思つたりもしたけど。

でも、それと同じような体験をしてみても、ここがそんな世界だなんて楽観視できないし、大体そんな話ではテンプレだつた神（笑）にも会つてない俺は何の能力も無いわけで無事に生き延びれる保証も無い。

よしんばそんな都合のいい世界だつたとしても俺はオリ主のようになれないだろうと思つ。

オタクで卑屈。

読んでいた二次創作も傍若無人、好き勝手にやつて神に貢つた力で威張つてんのに何故かモテモテハーレムみたいな所謂最低系が好物だつた。しかも俺はそのオリ主に自分でも引くぐらい感情移入して読んでいた。

俺の嫁に認定したキャラは軽く百人は超えてると思う。

そんな俺が何の力も無くアニメとかの世界に行つてオリ主？ あ

り得ない。精々モブキャラか真っ先に殺される役なんじゃないだろうか。

多分原作キャラとかに会つても話しかける」とすら出来ないと思う。

そう思ひとあのまま死んでしまつていたほつが良かつたんじやないかとも思えてくる。

「グルルルウウウウツ」

と、思考の海に沈んでいた俺の耳に何かの鳴き声のようなものが聞こえ、意識を戻す。

前を見ると

「つー？」

田の前、ほんの一めーとなる程の位置に自分と同じぐらこの大きさの狼に似た何かが牙を剥き出して威嚇していた。

声も出ないとはこの事だ。

突然の恐怖に身体が動かない。

「グルルツ」

そんなことなどお構いなしに狼はジリジリと距離を詰めてくる。そして

「グルオ ッ！」

口を開けて飛び掛ってきた。

「く、来るな来るな来るなあ　　つ……！」

俺は腰を抜かして尻餅をついて喚きちらしながら無意味な抵抗だらうけど腕をぶんぶんと振り回す。

「　ギヤンツ！」

振り回して手に何かが当たる感覚とそんな鳴き声。目を開けると、

「うげ……ゲロロロッ」

数メートル先の木に付いたおびただしい血と肉片、その下辺りに飛び散つた狼だつたと思われる”もの”の塊。グチャグチャで中のものが飛び散つて……それを見た瞬間、吐いた。

「…………ひいつー？」

吐くときに地面についた手を見ると真っ赤に染まっていた。

「これは……俺が？」

あり得ない。

また、あり得ないことが起きた。

俺が振り回した手に当たつて数メートルも吹っ飛んだ？ グチャグチャになるほど衝撃？

「な、なんだこれー？」

自分の頭の中なのに勝手に言葉が浮かんできた。

『あらゆる“力”を操る程度の能力』

そんな言葉が。

「と、東方！？　え、これが……俺の能力？」

じゃあさつきのは能力で“力”を上げて吹っ飛ばしたのか？

というか……」いつて、

「東方の世界……なのか？」

そう呟いた時だった。

地面が揺れ、何かとても強大な存在が現れるような空気が辺りに満ちて、

『グオオオオオツツツ

「なんだ……あれ」

とんでもない音量の声を上げて白い翼の生えた竜が数十メートル先に現れた。

「やめて！　フリーード　　ツ！」

その方角から幼い女の子の叫び声。

フリーード？

つて、リリカルなのは？

え、東方じゃないの？

『グオオオオオツ！』

え？ マジでリリカル？

プロローグ（後書き）

ま・た・最・強・系・か。
もう一方のが行き詰つてたときに気分転換に書き始めたけど、意外
と書けたので掲載。

1500とか2000字以内で更新頻度を上げるか、3000～5
000ぐらいで週に1～2回更新にするか……皆さんはどうがい
いと思いますか？
こんな感じの作品だと少ない方が書きやすい気もする。

猪……のような動物が此方に向かって歩いてくるのを木に登つて上から眺める。

能力で一撃でアレを昏倒させることが出来る程度に力を上げる。

「…………今だつ！」

獲物が真下に来たところで飛び降りて、脳天に拳を落とす。声を上げる暇もなく昏倒した獲物が確実に意識がないことを確認して持つてきていった縄で縛り上げ、また能力を使い軽々と持ち上げた。

今日は大物が獲れた、と俺は気分も良くなき出した。

この世界 多分確実にリリカルな世界 に来てしまつてから十日あまり経ち、俺は今、ル・ルシエの里で厄介になつていた。勿論、ただで人一人を養うほど里も豊かではないため、宿を借りる代わりとしてこうして狩つた獲物を提供しているのだ。

狩り自体は能力の確認の副産物であるため苦にはならない。

一番最初の獲物は能力を上げすぎて、この世界に来たばかりの頃に出会つた狼のような生物のように肉片が飛び散つてしまつたうえに、俺が殴つた所を中心に五メートルほどのクレータが地面に出来てしまつた。

それから怖いというのもあるし、そんな機会がないというのもあって、能力でどこまで力を上げられるかというのは確認できていな

い。

まあ、それは追々分かつていくと細つので置いておいて……今、一番重要なのは、

「またここにいたのか」

里の外れで肩に小さく白い竜を乗せて膝を抱えて座り、里の様子を伺っているキャロのことだ。

あの日 僕がこの世界へやつってきた日 キャロは白い竜、フリードリヒを召喚した。キャロが必死に止めようとしたこともあり、幸い村に被害はありませんでしたが、あれほど力を持つ竜を召喚したことによってキャロは里人から避けられるようになってしまったのだった。

「……ショウヘーさん」

キャロは泣きそうな表情でこちらに視線を向けた。

あ、ちなみにショウヘーとは俺の事である。

あさつき

浅月 翔兵、それが俺の名前。

「こんなところで何してるんだ？」

「わたしがいると……みんなが傷つくから」

顔を俯かせるキャロ。

「傷つく……ね」

言しながらキャロの肩に乗っている竜を見る。

白い飛竜、フリードリヒ。

今となつては、あの巨大な竜も見る影もなく可愛らしくなつてゐる。

「わたしはまだフリードを上手く制御できないですから」

キヤロがフリードと言つた瞬間、肩で「キュークル」と鳴く姿からはとても暴れるとかといった雰囲気は感じられない。カジ、確か原作ではこれが原因で里を追い出されるんだよな。

「ま、すぐにはいい出来る問題じゃなやうだな」

「……はー」

「それよつさ、今日は大物捕まえたんだ。一緒に食おうぜ」

キヤロの手をとり立ち上がらせる。

「こ数日毎日の事なのでキヤロも抵抗することなく着いてくる。

今日は焼肉にしようか、それとも鍋にしようか。
あれは見た目おり猪肉近い味なのだらうか？　だとしたらやつぱり鍋か。

とつあえず里の長に渡した獲物も捌かれてることだらうから肉を貰いにいかないとな。

「では……やはう」

「…………うむ」

村長宅前に着くと、中から数人で話し合つ声が聞こえてきた。

「キヤロには……村を出て行つてもひつかないじやん」

やけにハツキツとその言葉が聞こえてきた。

「…………」

立ち止まつたキャロえの様子を見てみると、目に涙を溜め、繋いでいる手は微かに震えていた。

「あの力は危険ですからな。当然でしょ」「う

「そうです。あんな力は争いと災いしかもたらしません」

中からは安堵、安心したような言葉。

それを聞いたキャロは俺の手を振りほどき走り去ってしまった。

「…………くそ」

誰に言つでもなく呟いて拳を握り締める。

キャロをここにつれてきてしまつたことに俺は後悔した。

フリードが暴走してキャロが追放される……俺はそれを知つていてのにもしてこなかつた。それを今更後悔したところでどうなるわけでもない。

だつたら、これからのことを考えよう。

その方がずっと建設的だ。

まず、キャロは追放される。それは原作から見ても確実だ。

ただ、その後どうなるか……フェイトに保護されるまでの間はあまり原作で触れられていない。

追放から管理局に保護されるまでも少しの間があつたはずだ。その間、キャロは一人と一匹で旅をしていったような描写が漫画版であつた記憶もある。

だつたら 僕は覚悟を決め、長の家に入つていった。

「よつ、キャロ」

里から少し離れた場所にキャロはいた。
泣いていたのだろう、顔は赤くなっていた。

「わたし……どうすればいいんだしようが」

「どうすれば……つて？」

「里を出で……どこに行けばいいんだしようが」

「里に残るってことは考えないのか？」

「わたしがいると……みんなを巻き込んでしまこますから」

「それでいいのか？」

「…………。わたしも、わたしの所為でみんなを危ない田にあわせたくなっています」

キャロは里を出ることを自分で納得してしまっているようだ。

「じゃあ……いいに行けば、キャロはビックリと肩を震わせて俯いてしまった。「……」

俺がやつらとキャロはビックリと肩を震わせて俯いてしまった。「……」

「わ～……俺ひどいから。なんつーひとを言つんだよ。

「だから……ちやんと制御できるようにならなことない」とも行な

ないんじゃないかな

「じゃ、じゃあ、どうしたらいつこいつに言ひこですかー?」

「だから……ちやんと制御できるようにならなことない」とも行な

ないんじゃないかな

「どうしたらいつこいつに言ひこですかー?」

珍しく声を荒げるキャロ。

「うん。だから……上手にフリードを使いこなせるようにならひ。

そしたら、どこへだつて行ける

「…………無理、です」

「出来るよ。俺はそれを信じてる」

「どうか、原作では使っこなせんやつになつたつて知つてる。
だから頑張ればもつと早く出来ると思ひ。

「俺と一緒に来ないか?」

俺はキャロに手を差し出す。

「実を言つと、俺も自分の能力を使いこなせてないんだ。だから一
緒に頑張ろつ」

俺の差し出した手を見つめて黙つてしまつキャロ。
暫くそつして……

「ショウベーさんは……わたしの力が怖くないんですか?」

そう訊いてきた。

「怖くないよ」

「な……なんですか?」

「だって……キャロは絶対に上手く使えるようになるから」

「…………ふえ」

笑いかけると、キャロは泣きそうな表情になつた。

「それにフリードが暴走しても、俺がぶん殴つて大人しくさせてやるよ」

俺の能力ならそれが出来るから。

「どっちが先に上手く使えるようになるか競争な！」

もう一度、力強く手を差し出す。

キャロは泣きながらその手を握り返した。

「これからどこに行くんですか？」

泣きやんだキャロがそう尋ねてくる。

「とりあえず……力の制御が出来るようにならなきゃ街になんか行けないとと思うからな、えへっと」

言いながらポケットからある物を取り出す。

「人の居ない無人世界の方が特訓には良いと思って、長から貰つてきた」

取り出したのはいくつかの世界への転移魔法がセットされているストレージデバイス。

実はあの後、キャロのこれからについて　俺と一緒に連れて行

く、と 長の家に乗り込んで話し合つた。

その結果、これ以外にもいくつかのアイテムと食料を受け取つたのだ。

「あと長から『伝言』、『里の為とは言え、お前には申し訳ないと思つて』いる。恨んでくれて構わない。ワシに出来るせめてもの事といえば旅立つお前にいくつかの贈り物をするぐらいしか出来ない。キヤロ、お前は黒き火龍の加護を受けている……だから、いつかきっとお前は稀代の召喚術士になるだろ?』 つづけ

『伝言なのに長につづけの!』

『ここに来るまですつと頭の中で繰り返し呟いてなきや忘れるわ!』

「つづけことで、行こうぜ、キヤロー。いつかと言わすすべになつてやれよ。稀代の召喚術士とやらうござー。」

「…………はいっ!」

キヤロは涙を拭つて元気に返事をした。

うん、原作ではフュイトと出合つた当初のキヤロは笑わなかつたわしいが……そんな風には俺がさせない。子供は笑つてるのが一番だ。

「とにかくで、キヤロさんや

「なんですか?」

「転移魔法つての使つてもらつていいかい?」

長から貰つたストレージデバイスをキヤロに渡す。

「ええっ！？ わ、わたし転移魔法なんて使ったことないです！」
「長が言つにはリンクアーコアがあつてある程度魔力があれば誰でも
使えるぐらいには簡単に出来るようにしてあるらしい」

だがしかし。
だが、しかし！

「だけども俺つてリンクアーコアがあるのかどうかすら分からんいん
だよね。よしんばあつたとしても魔法なんて使つたことないのです」
「ええ　　っ！？　だ、だつていつも凄い力で」
「……あれは魔法じやないんだ」
「レ、レアスキルですか！？」
「ん、まあそんなとこかな」
「で、でもわたし……もし失敗しちゃつたら」
「大丈夫大丈夫！　それでも俺がするより成功する確率高いって！」
「そ、そんなんあ～……」

最後までかつこつけたかつたけど無理でした。

1話（後書き）

何かタイトル考えるのメンドクサイので無しの方向で。
気まぐれでつけるかもしれないんですけど。
とりあえずプログラグだけだとアレなんで寝る前に予約しといった。

2話（繪畫版）

「」の小説は基本「メテヤー」「」の小説である。

「キャローハ、そろそろ戻るぞーー！」

もうすぐ日も落ちるので訓練は終わりにしようと思つて、少し離れた場所で大きくなつたフリードに「いつ」とを聞かせているキャロに声をかける。

「はいっー！」

振り向いたキャロは額に浮かんだ汗を腕で拭つて元気に返事を返してきた。

「フリード、戻つてー！」

そうキャロが命令するとフリードは素直に従い元の小さじ姿に戻つた。

「キュクルーンー！」

一鳴きして、キャロの肩にとまる。
そしてとてと走つてくるキャロ。

俺のところまで辿りついたキャロと一人、並んで歩く。少しすると中々に立派なログハウスが見えてきた。
立派とか自画自賛だが、俺が作つた。

ちなみに、ル・ルシエの里を出てから一年程月日が経っている。幸いキヤロが使った転移魔法は成功し、俺たちはこの無人世界へやつてきた。

ここには大型の生物（A-s）で、ヴィータが戦つてたようなのとか（）も多々、俺やフリードの訓練の相手には事欠かない。

キヤロのフリード制御も大分上達し、最初の頃は暴走させてばかりだつたものの最近では感情が高ぶつてしまわない限り、ほぼ完璧に制御できている。

力の使い方に関してはもういつことではないほど順調だ。

だが

「キヤロ、俺が料理作るから火熾して」
「だが断る」

凄くいい笑顔で言われた。

「なぜに？ 俺、料理するから火頼む。な？」

用意した包丁と訓練の時に狩つた獲物を見せながら頼む。

「断固拒否」
「だからなんでだよ！？」
「疲れてるんですよ！」

キレられた。

「いやいやいや！ 俺だって疲れてるからね！？」

「成人男性のショウヘーさんと子供の私を同じだと思わないでください！」

「そんなこと思つてないけど……お前滅茶苦茶元気じやん！ 働けよー！」

「嫌です！」

「嫌つてお前……何でだよ！？」

「働きたくないでござる いたいっ！」

「嫌です！」

キヤロの言葉を遮つて頭を軽く叩く。
昨日教えたネタじゃねーか。

「何するんですか。コブになつて頭が大きくなつたらどうするんですか！」

「いいじゃねーか。身長伸びて。このチビがつー！」

「なつー？ 淫辱されました！ 謝罪と賠償を要求します！ 具体的には食後のスイーツを毎日ぐだせー！」

帽子越しに頭をさすりながら涙目で睨んでくる。

ほんと、力に関しては問題ないのに……なんでこんな性格になつてしまつたのか。

まあ、子守唄と絵本の変わりにネタ話を毎日した俺の責任だけ。原作知ってるだけに、あのキヤロがここまでは太くなるなんて思わなかつた。

「はいはい。成人男性も真っ青な高カロリーなスイーツを毎食後出してやるよ。ただし残すなよ？」

「なん……だと……」

戦慄の表情で震えるキヤロ。

「なんという鬼畜。スイーツは食べたい、でも食べたら確実に太る
メニコーとは……なんて鬼畜！ そんな究極の選択を迫るなんて…」
「火を熾せば今日の今日の食後は普通のスイーツを出してやるわ」
「わーい！ ショウベーサンだい好きー！」

なんとこう変わり身。

はあ……ほんと、どうしてこんな娘になつちゃつたんだかわ。

キヤロは寝るときも帽子を取りない。

原作ではそんなことなかつたと思つただけど、ここはキヤロせぬ
うだ。

今も帽子は着けたまま涎を垂らして寝ている。

ちょっと前、興味本位で寝ているキヤロの帽子を取りひつとしたこ
とがあった。

取るぞ、と帽子に手をかけた瞬間、キヤロは口を開き俺から距離
をとつた。帽子を押さえ「スケベ！ 変態！ ロリコン！ ショウ
ベーサンのエッチスケッチワントッチ ッ！…」とこう死語
を叫び飛び出していく。

あ、ちなみに「ワンタッチ」の部分が「乾電池」の地方もあるら
しいよー。これ豆知識なー。

まあ、そんな訳で帽子には一方ならぬ何かがあるらしい。

が、風呂のときは外すし、暑かつたりしても外すので別にそんな

に拘りないんじゃないかとも思つ。

え？ なんで風呂で外すなんて知つてゐのかつて？

そりや勿論、一緒に入つてゐるからに決まつといひが。

でもこれだけは言つておきたい。ストライクゾーンは広いと自負してゐる俺だが、まだ欲情しないぞ。
生意氣だし。

初めて一緒に入つたとき、純粹な笑顔で俺の「ゴールデンお玉せんを握りつぶそうとした愚行は忘れていない。

奴は天然のクラッシャーだ。

それは置いておいて、ずっと言つてゐるがキャロの力の制御に関してはかなり良くなつた。最近では召喚魔法も覚え、原作同様鎖とか召喚する。

が、使い方がおかしい。

前にあまりの空腹で見境なく喰つた亀の甲羅（三メートルぐらいの大きさ）を召喚した鎖で縛つて（勿論、亀甲縛りである。亀の甲羅だけに）振り回す。

後方からフリードにブラストフレアを撃たせ、ブースト魔法で強化した自分が亀甲縛りの亀の甲羅を武器に突つ込むという超前衛的な戦い方。

しかも「うりやあああああ…」とか叫びやがる。

やつぱり育て方を間違えた気がする。

2話（後書き）

キヤロ崩壊。

タイトルを分かつて見くらるために少し変えました。

やつぱり一田だといのぐらにかもつかつとしなごぐらにが畠わら
すい。

そんな感じでキャロの現状に関しては分かつてもらえたと思う。続いて、俺の『あらゆる』力操る程度の能力についても色々と分かつたことがある。

最初に言つておく。

この力は非常にチートだった。

まず、最初から使つていいように純粹に『力』を上げることが出来る。巨大生物を軽く数百メートル吹っ飛ばすなんて朝飯前だ。次に狩りをしていた時に気付いたのだが視力や聴力も無意識に上げていたらしい。

それに気付いた俺は早速『力』とつくるものならなんでも出来るのかと試してみた。

結果から言つてしまつと……出来た。

今までの『力』は本当に殴る力だけを上げていたようだが、理解して使つてみればそれ以外にも操作できた。

まず試したのは脚力。

ジャンプしたら軽く数十メートル飛んだ。

着地までの落下がかなり怖かったのは内緒だ。

次に体力。

一日中走つても息一つ乱さなかつた。

それから、戦闘中に動体視力を上げてみた。

相手の攻撃がスロー再生のようにハツキリ見えるようになった。

とまあ、こんな感じで身体能力全般を上げられる。

勿論、身体能力で全ての能力を上げることも腕力など一部だけ上げることも出来るが、それが分かつてからは身体能力全てを上げるようにしている。

動けるようになると楽だし。

しかも一度操作すると、もう一度能力を使って下げない限り、そのままの身体能力がデフォになる。

とりあえず、この世界の生物じや俺に傷一つ負わせられないぐらいの身体能力に設定してある。

それから能力で色々出来ると分かつて試しているときにちょっとした怪我を負ってしまった時のことなのだが、回復力を上げてみると一瞬で怪我が治った。

他にも生命力、氣力、精神力とか良く分からないものから魔力、靈力、妖力、神力と言つた俺のいた世界ではなかつたはずの”力”。さらに重力、引力、斥力なんでも操作できた。

魔力とかは一つづつ上げてみると微妙な違いがあるので違う力だと言うのは分かった。ただ神力だけは段違いだつた。

魔力や靈力を一〇〇使って起こす様な現象を神力ならたつた一の使用量で起こすことができた。

つつても、全部無限に上げれる俺には関係ないけどな。

そして、この力がチートたる所以。

今まで試したことを探まえ「出来るんじゃね?」とか軽く考えてやつてみたら出来てしまつたものの。

それは

あらゆる”能力”ですら自在に操ることが出来たのだ！しかも東方や色んな作品の能力だけではなく『自分で考えた能力』ですら操れてしまったのだ。

フランデールの『あつとあらゆるもの破壊する程度の能力』で近くの岩を壊そうと思ったら、手のひらに目みたいなものが浮かんできた。さすとしたらドカーンってなった。

あと、境界も操ってみた。

空中に指でピーッと線を引いたらそこからぱっくり割れてあの日とかだらけの空間が見えたのには感動したが、ちょっと怖かった。あそこに入る勇気は俺にはまだない。

しかもこの能力、俺以外の相手にも使えるのだった。

日々傷だらけになるキャラ口に後々傷が残らないように回復力を高めてやれば一晩寝れば大抵治るし、気付かれないように毎日少しづつキャラ口の魔力を増やしていくのは秘密だ。

StSの原作開始までにUランクぐらいまで増やしてしまいたい。出来ればもっと増やしてキャラ口無双とか見てみたい。

亀の甲羅振り回しながらナンバーズフルボッコとか見てみたい。んでバインドの変わりに亀甲縛りで拘束とか超見てえ……。

あと、全然関係ないけどフェイトさんの真ソニックフォームは是非で見たい。それに、なほさんが戦つてるときに下から除いてみたい。

「」の一つは絶対に達成させてみせる。

「靈 んつ！」

人差し指を突き出して叫ぶ。

結構離れた位置にいる巨大生物に向かって十メートル級の靈力の塊が飛んでいく。

接触、爆発。

砂煙が晴れるとピクリとも動かない巨大生物が居た。

「なんですか、その理不尽な威力。溜めも全く無いじゃないですか！ フリードのブラストフレアの何倍の威力ですか！ あの程度の威力しかないのにブラストフレアーとか叫んじゃった私が恥ずかしいじゃないですか！」

キャロが何故かキレイていた。

「いや、知らんがな……」「ムキ ツ！」

3話（後書き）

休みなので更新。

やつぱりこのぐらいが書きやすいかも。
短いですかね？

さて、ル・ルシエの里を出てかれこれ一年が経とうとしている。

「キャロ」

「ふぐ……なんですか？」

食事中、キャロに話しかける。

ちゃんと口の中のものを飲み込んでから返事をするキャロはそんなにじだけまともに育つたらしい。

「それそろ、別の世界に行つてみないか？」

「ふえ？　どうしたんですか、急に。行つてみたいんですけど」

「いや……キャロも力の制御はほぼ完璧だし、そろそろいいかなって」

実際、キャロはもう殆ど暴走させることはなくなつた。
俺も能力に関しては思いつく限りの事は試したしな。

何より……この一年、訓練と称し暴れまくつた所為か、そろそろこの世界の生態系がおかしくなつてしまつ『氣』がした。というか、ちよつと変わり始めてしまつている。
地形も所々変わっちゃつてるし。

何よりこの一年間、キャロとしか話していない。

そろそろ人と関わりたい。

あと、買い物とかしたい。

まあ、能力でなんでも作り出せるんだけど……服とか雑誌とかもないしどザインとか考えるのメンドクサインだよね。

だから俺は普段着に『まじかる』に来たときの服を複製して使っている。し動くときには大好きな漫画キャラの服を着ている。

この世界だとそれほどコスプレって感じに見えなくて堂々と着れるんだよね。

良く着るのはフジリュー版封神演義の太公望、伏羲、王天君から気分に合わせて選んでいる。

そんな俺が幼女の服なんて分かるはずもなくキャラには原作のバリアジャケットと同じものを着せている。

普段も訓練のときも。

「でも、『まじかる』に行くんですか？ ミッドとか？」

ミッドはマズい気がする。

なんか面倒事に巻き込まれそうというか……。

俺もキャラも管理局に属していないわけだし。

あつ！ てか、このままじゃキャラの機動六課入りがなくなるんじゃね？

それどころか、キャラをどうやって管理局に所属させるんだ……。

……ヤベホ、変な汗出てきた。

ま、なるようになるだろ。うん。

「地球行かね？」

「地球……って確かショウウヘーさんの故郷でしたっけ

「そうそう

「それどんな人外魔境なんですか。行きましょう！」

「あれ？ なんかおかしくね？ 張り切るのはいいけど、おかしくね？」

なにはともあれ、いつして俺達の地球行きが決定した。
別の世界であっても地球は地球。年代だって大して変わらないから、とりあえず俺は普段着で良いとして……キャロはどうしよう。このままじゃ確実に注目を集めめるだ。

「とりあえずキャロはこれに着替えてくれ

即席でシャツとスカートを作つてキャロに手渡す。
キャロは受け取つた服を引きつた顔で見つめ

「無理です。これは着れないです。ありえないほどダサイです」

突き返してきた。

え、ダサイ…………だと。

確かに俺はセンスがあるとは思わない。
特に女の服なんか余計にだ。

適当に作り出したとは言え、ここまで言わると若干へこむ。
気になつたのでキャロから返つてきた服を広げてみた。

「…………ダセH。マジ、ダセH」

思わず自分で言つてしまつほどダサかった。

それは……ちびまる子ちゃんの服だったのだから。

「良し！ 着替えたな？」

「はい！」

「荷物は？」

「完璧です！」

アレから試行錯誤の末、訳分かんなくなつて制服にスクールバス
トというどこの私立小等部ですかといつ感じになつた。

まあ好きだけど。

パークーでも良かつたけど夏だつたら悲惨だなと思つてこいつをこ
した。

「それじゃ、いくぞ！」

言つて、スキマを開く。

行きたいと思えば多分行ける。

除いただけだけどル・ルシエの里とミシドは行けた。
多分地球も大丈夫。

転移魔法は使えない。

だつて正確な位置が分からぬから登録出来ないし。
てことで、今出来る唯一の方法がスキマを使った移動なのだ。

俺はキャロの手をとつてスキマに飛び込んだ。

「……よいしょ、つと」

「あやつー、な、なにー？」

「え、ええ！？」

スキマを潜るとそこには……金髪と紫髪の美女達が驚いた顔で此方を見ていました。

「あ、ども」

とりあえず挨拶してみた。

「歌」

紫の方……月村すずかは警戒しながらも返事を返してくれた。

「何普通に挨拶してるのでよーつ！ アンタ何！？」

怒った表情で詰め寄つてくるのは金髪のアリサ・バーニングス。

「何と言われても
「急に現れたりてことは……アンタも魔導師な訳！？　なのはの敵
！」？」

え?
最初から敵認定?

「ア、アリサちゃん落ち着いて。管理局の人かもしけないよ?」

「あ、そこか、て管理層の人？」

「やつぱり違ひじゃない！ じゃあほのせの敵なのね！？」

「あ、シラウカーさん！ あそこから良い匂いがします！」

良いスイーツの匂いです！ 食べに行きましょうー。」

「あちまわるつたり無視で少し先の店に走っていくキャラ。
その店には『翠屋』という看板があった。

「あ、じゃあ、あの店で話しません?」

「つあえず」の一人をじつとかしちゃう。

4話（後書き）

予約するの忘れてたー！
すぐ気付いてよかったです。

やつぱつこのがもつ少し少ないぐりこの文章量で行いつと感
います。

こつちの小説で初感想（「メンツ？」）キターッ！
もう一つの方でも貰つてますナビ、じつはいつも別の喜びがあ
りますね。

「それで……アンタ一体何なのよ」

翠屋店内。

同じテーブルに座り、半田で睨んでくるアリサがそつ尋ねてきた。すずかは苦笑しつつケーキを馬鹿食にしているキャラの世話をしてくれていた。

「何って言われてもね」

何て答えりやいいんだ……旅人？

「旅人？」

そのまま答えてみた。

「はあ！？ 何それ！ 馬鹿にしてんの！？」

やつぱりこの答えは違つたらしい。

さて、どうするか……この一人は悪い奴じやないのは分かつてる。でも、一人からなのは達に伝わつて変な風に管理局に関わられるのは避けたい。

関わるにしてもこりから、ちゃんと準備を整えたうえでとこう風にしたいしな。

「ん~、とりあえず……管理局を知つてることとは魔導師の知り合いが居るつてことでいいか？」

知らないふりで質問する。

「やつよー。アンタが犯罪者なら突き出してやるんだからつーー。」

鼻息荒く捲くし立てる。

「犯罪者ではないよ」

今現在、ここでの支払いは能力で作り出したお金で済ませようとしているが。

仕方ないよな。お金ないんだもん。

「存在が犯罪ですけどね」

ケーキを食べながらキャロがふざけたことをぬかす。

「お前……あ、すいませーん！ 伝票別々にしてくださいーー」「わあー！ ジめんなさい！ ジめんなさい！ 嘘！ 嘘です！」

店員さんに声をかけると必死になつて謝つてきたので許してやることにある。

「あの……一人はどういう関係なんですか？」

すずかがおずおずと質問していく。

「どうこうつて？」

「えへっと……その、じ兄弟には見えないので」

「やつよー。髪の色からして違つじやないー。」

あ～、確かに。

なんかすずかの視線も怪しいものを見る感じが含まれてるし。

「関係ねえ……」

考えながらキャロを見る。

俺の視線に気付いたキャロがケーキを飲み込んで任せろとばかりに頷いた。

「ただならぬ関係です」

「ふはつ」

「じほつ」

俺とアリサが同時に紅茶を噴き出した。

「ちょ、おま、なんつー」とを

「え、違うんですか?」

「全然違うだろー!」

一人の田つきがやばいぐらに鋭くなってるよー。

「ロリコン……」

「……誘拐?」

「違うから! 一人が思つてるような関係じゃないからー!」

くつ、やべえ……一人の視線が半端なく冷たくなつていいく。
しかも、椅子動かして距離とられるとか泣けてくる。

「違うって……俺達は

普通に全部説明してしまいました。

「キャロちゃん」

すずかは涙ぐんでキャロを抱きしめ、

「アンタ……良い奴だったのね」

アリサは俺に微笑んでます。

俺が説明したのは三つ。

俺は一応魔導師だが訳あって旅をしていた。
キャロの里に厄介になっていたがキャロが追放されると知った。
俺が保護した。

「話は分かったけど……なんで管理局に連絡しなかったのよ

アリサが言った。

「うん。連絡すれば保護して貰えたんじゃないかな」

続けてすずか。

「ま、保護はしてくれるだろ?」

「だったら何で? キャロぐらいの年齢で旅なんてつらいんじゃない

い？」

心配そつこアリサが言つが、

「え？ ロイツ見てそつ思ひへ。」

「どひいつ事ですか」

意外な事をといった表情を作つてキャロを指差すが、キャロに不機嫌そう手を払われた。

「あ、あはは……」

苦笑するすずか。

「それに、保護はしてくれるだろひナビ……将来は確実に管理局入りさせられてキャロの力を使われるだろひな」

管理局は力があれば子供だらうと何だらうと容赦なく使つ。裏で違法なことしてゐるのも原作知識で知つてるしね。

「ま、そんな訳でキャロが自分の道は自分で決められるようになるまでは俺が面倒みよつと思つてゐわけだよ」

建前ではね。

実際S+S始まつたら巻き込む気満々だし。

その後管理局にいたつてんならそれは俺が口出す」とじやない。

「ふうん。でもなのは達に言えばそんなことにはならないと思つわ

「九十

アリサの言葉にすずかも頷いている。

「そのなのはつて人は知らないけど……所属する組織自体に怪しい
ものがあるんだから、安心は出来ないな」

今の管理局は上のほうは肩が多いし。
てか、こんだけ嫌がってるんだからなのは達に言つのはやうそろ
諦めてほしい。

「あ、アリサちゃん、すずかちゃん！　来てたんだ！」

と、店の奥の方から田村ボイスが聞こえてきた。

「…………」

振り向くと、長い髪をサイドテールにした高町なのはが手を振つ
て近づいてきていた。

「なのは……いたの？」

「うん！　明日はお休みだから仕事が終わったら急いで帰つてきた
んだよ！」

「なのはちゃん、久しぶりだね」

「うん。久しぶりすずかちゃん！」

楽しそうに話す三人。

「…………」

俺は冷や汗ダラダラだった。

5話（後書き）

なんか話が全然進まない。
会話に違和感がある気がする……なんだらう？

主人公の能力ですが力を操るなら腕力や魔力、集中力などはともかく、能力などは元がないので操れないんじゃないか、だったら司るにしたほうがいいのではないか、という指摘を頂きました。

一応説明させていただくと、主人公の能力は
『あらゆる力を操る程度の能力』です。
“あらゆる”ですので、ここでは“力”と付くもの全てを操ること
が出来るという設定にしています。
。
。ご理解いただければ幸いに思います。

「それじゃ、詳しい話を聞かせてもらおうかな」

アリサとすずかから簡単に俺達の説明を受けたなのはが良い笑顔で仰った。

くそう……なんの躊躇いもなく俺達のこと話しゃがつて。

「…………フ」

ア、アリサのやうひ……俺の方見てニヤツて笑いやがつた！
まさか管理局に関わるのが面倒だからって話したさつきの話信じてないな！？

確かにまともな事言つてるので適切なこと言つたけども。
キヤロが利用される？ ハツ、今のコイツがそんなタマかよ！
図太い神経しとるわ！

「えへ、お断りします」

「丁重にな！」

「それじゃあ連行しますね」

だからその笑顔が怖いよ！

A's 終わつてるから既に魔王なのか……。

「ね、お姉ちゃんと一緒に来てくれるよねキヤロちゃん？」

俺では埒があかないと思ったの、かなのせはキヤロに話しかけた。

だが甘いな、高町なのはー！

「断固拒否」

「な、なんでー？　ビ、ビ'うじてかな？」

即答したキャロにうるたえるなのは。

「怪しき管理局員には着いてちや駄目だつて言われてるのべ」

「ぶつ」

興味なさそりにケーキを食べながら言つキャロに思わず噴き出しつしまつたが、なのはに物凄い勢いで睨まれたので咳払い誤魔化す。

「えへっと……近くに信頼できる人がいるんだけど会つてくれないかな？　ちょっと話聞かせてくれるだけでいいから」

それでもめげずにキャロを誘つのは。

この近くにいる信頼できる人って……リング黛イか？

絶対会いたくない。

あの人相手に口で勝てる気がしない。

そんなことを考えている間にもなのはのキャロへの説得はヒートアップしていた。

「だから、お話をしてくれるだけでいいのー！」

「…………」

「リング黛イさんなら悪いよつことは絶対しないからー！」

やつぱりソングティカ。

「旅してゐて言ひけど、キャロちゃんぐらゐの歳でそんな生活は辛いと思うし……学校とか行ってみたくない？ 友達も沢山出来るよ」

てかなのには、真剣だしキャロのこと本氣で心配してくれてるのは伝わつてくるんだけど……キャロ本身がいい加減鬱陶しげて表情になつてきてるぞ。

今的生活が辛いとか本人が言つたわけでもないのに予想で話しかや駄目だぞ。

つーか、コイツ嬉々として亀の甲羅振り回して巨大生物追っかけてるんだぞ。

「だからね きやつ！」

と、キャロが急に話しているのは胸を驚撃んだ。

「その程度の戦闘力^{バストサイズ}で私の話を聞けるなんて思わないでください。私の話が聞きたいならもつと採用のあるオッパイを用意してきてください。ポン、キュウ、ポンを所望します」

「な、ななななな…………」

胸を隠すように押さえ後ずさるなのは。

「あ、貴方！ どういう教育してるんですかーー？」

怒りの矛先が俺にきた。

なんでだよ……俺だってこんな風になるなんて思つてなかつたよ。

原作の純粹なキャロを返してくれ！

「なのはー。」

赤い顔で睨まれ氣まずい空氣の中、弾ける様な声で店内に入ってきた人物がなのはに声をかける。

「フェイトちゃんー。」

そちらをみたなのはも破顔して対応する。

「帰つてきてるってはやてに聞いたから急いできたんだ」

「そりなんだ。フェイトちゃんもお休み？」

「うん。たまには顔見せなさいって母さんが言つから……昨日いつ
ちに」

その人物はフェイトだった。

「ボン、キュッ、ボン……だと」

フェイトを見てキャロが慄いた。
まあ……分かる。

フェイトさん……スタイル凄すぎです。
もう、なんつーか……フルンフルンしてやがる。
しかも美人。日本受けする美人。

思わず結婚申し込んでしまいそうになつたね。

(キヤロ……一人の世界に入ってる今の中に撤退するや)

俺は念話（実は使えるのだ）でキヤロに叫ぶ。

（で、でも……折角のアレを揉まずに帰るなんて）

（お前いつからおっぱい好きになつたんだ？　おっさんみたいだぞ）
（乙女におっさんとかどうこうことですかっ！　人間誰しも大きい
おっぱいには惹かれてしまつものなのです。ということで揉んでき
ます！）

（ふざけるな！　俺だって揉みたいのに何でお前だけ揉むんだよー！）
（ふふん。私は幼女なので問題ありません。シヨウベーゃんは犯罪
です）

（ぐざわざわざわざ……そんなことこんなじつならお前を管理局に差し出すぞ）

悔しいので反撃しようとそんなことを言つてしまつた。

だがキヤロは

（なつ！　私を売つて言つんですか……あ、だけど管理局に保護
されればあのおっぱいを揉むチャンスも増えますよね）

あれ……満更でもない？

「あのー」

キヤロが一人の世界に入つてゐるのは袖を引く。

「あ、キヤロちゃん。どうしたの？」

「私もお話ししても良いです」

「ホントー？」

「はい」

な、なんという行動力。

「なのは、その子は？」

「うん、実はね……」

なのははフュイトにキャラの事を説明する。

「お、俺を無視して話が進んでいく……だと？」

「アンタ、空氣ね」

「ア、アリサちゃん、そんなこと言つたりや駄目だよ」

アリサに嘲笑われた。

すずかの優しさが身に染みた。

惚れてまうやろー。

6話（後書き）

『オッパイ』より『おっぱい』の方が柔らかそうな気がする。
そしてフュイトさんはフルンフルン。
リリなのキャラはみんな好きですけどフュイトさんとチング姉は
別格。

なんか有り得ないぐらい順調に読んでださる方が増えてる。
最初の投稿で一日のユニークが300から昨日は1500……増え
方が妙なプレッシャー。
お気に入り登録も昨日一気に倍ぐらいになつたし。

「つまり、貴方は旅の途中、偶然キヤロさんの里で宿を取っていた。キヤロさんは力を暴走させてしまい里を追放、貴方がキヤロさんを保護し、共に無人世界で生活しつつ力の制御を学んでいた……間違いはありますか？」

状況説明ありがとうございます！

あれからなのは達に連れられハラオウン家にやつてきた俺はリンディさんに大体本当のこと話をした。

勿論、俺の正体や能力については話していない。

さすがに話せないし、キヤロにも言わないように言い聞かせてあるし理解してくれている。

「本當だつたんだ……ちょっと嘘だと思つてたわ」

後ろでアリサがひどい言い草をしていた。
俺はアリサに近づいていく。

「お前、ひどいよな。信じない挙句、人が知られたくないって言ってた管理局の人間に話すんだから」

「確かにアンタとあの子の関係については納得したわ。全部本当のこと言つてると思つてないけど大筋はそんなんじょ」

「だったら、なんで」

「でも、アンタが怪しことは変わらないのよ。魔導師のアンタが何で魔法のないこの世界に来たのかとか、管理局に会ったがらないのはやましい事があるからなんじゃないのかとか」

まあ、管理局についてはなのは達から聞いた情報ぐらいしかない

から警察みたいなもんだと思つてゐるんだろうな、アリサは。警察に会いたがらない俺は何かやましい事があるんだろうか、と。

「だから、やつさ話をしただら、キヤロのことを考えてだよ」

「それは……なのは達なら信用出来るつて言つたでしょ？」

「高町さんがそうだといつて管理局がそつだとは限らないだり

「……どうこいつよ？」

「「Jの世界の管理局みたいな組織だつてそつなんぢゃないのか？良い奴もいれば悪い」とする奴だつていふ」

とりあえず、なのはの事は高町さんと呼んでいる。
イキナリ名前で呼ぶとか有り得ないだろ。
心の中は別として。

「それは……そうだけど」

「組織なんてそんなもんだ。俺は色々な世界で旅してきたから管理局にもそんな奴らがいるつてことも知つてゐる」

実際は原作知識だが。

しかもそれが管理局の最高幹部だもんな。

「だから知られたくないなかつたんだよ」

「う……つ」

ため息を吐く俺にアリサがたじろいだ。

「ま、今更どうしようもないけどな。それに確かに高町さん達は信用できそつだし。「Jのやつこ話べらじましてもここと思つてゐる」

俺はともかくキャロのことは本気で考えてくれたのはわかつたし。

「わ、悪かったわね……」
「…………」
「な、なによ？」
「いや、まさか謝られるとは思ってなくて」「私だつて謝ることぐらいあるわよ！ それに……もつとちゃんと話せばよかったと思つたし。そつすればあの時よりはアンタの言うことも考えただろうし」「

と言つても、あの時はあそこでなのが乱入してきたから話を続けるどころじやなかつたしな。

ま、ちゃんと話すとアリサも良い奴だつてのは分かる。

怪しい奴が自分の居るところに現れたら普通疑つてかかる。

しかも相手は魔導師なわけで、もし何か企んでるような奴だつたら周りに被害が出る可能性もあつたわけだしな。

「なんにしても、初めからなんの疑いもなく人を信じるよつな奴よりお前の方がずっと信用できる人間だつてのは分かつたよ」「つ！？ ……な、何言つてんのよ！ バカじゃないの！？」

「コホン……何故すぐに管理局に連絡しなかつたのですか？」

今まで他人には聞こえないぐらいの声で話していたのだが、最後にアリサが大声を出したところでリンクティが話をも元に戻しにきた。てか、やっぱこの手の質問かよ。

なんて答えよつ……なんか、何で答えるても碌なことにならないような気がする。

正直キャロについては全部話してもいいんだよな。原作でもフロイトに保護されたからのキャロは幸せそうだったし。

なんならこの場でキャロをフロイトに預けてもいいぐらいだ。

キャロのことを言い訳して、なんだかんだでフロイトに定期的に連絡をとることで一人の中は親密に……あれ？ これ、メッチャ良い案じやね？

「よし、キャロ！」

「……なんですか？」

「なんで冷たい目線をくれてやがるのかは知らんが、お前さえ良かつたら俺じゃなくてここの人たちに面倒見てもうつか？」

「どんなこと考えてそんな結論に至ったのかは、そのだらしない顔を見れば大体想像はつきますけど……バカですか？ 私みたいな子供を利用するとか腐つてますね」

なんかマジですげえ冷たい視線なんですけど。

「利用とか、お前人聞きの悪いこと言ひなよ」

「実際そうでしょう」

「うだけど。

「あの、それそろ話を戻してもうつていいかしり

すぐに脱線する俺達に笑つてない田で話しかけてくるコンビティさん。

「ちゃんと力は制御できるようになりましたか？」

「ランティさんはキャラ口に尋ねる。

「完璧だし」

不敵な笑みのキャラだし。

「あなたは魔導師だということですが……ランクは?」

キャラはスルーして今度は俺に問いかけてきた。

「ふ、俺のことが知りたいのか?」

「ええ、知りたいわね」

「ま、教えるもいいんだけどね。どうせ、いつかは教えるつもりだし」

原作キャララゲットだぜ、を狙ってる俺には避けては通れない道だしな。

「でも、ただで教えるのもあれだし……ちょっとゲームしません?」

「ゲーム?」

「俺たちは逃げますんで、捕まることが出来たら全部話しますよ」と。リンディさん以外にもこの場に居るキャラ以外全員の声が重なった。

俺はキャラに近づき

「逃げられると思つてゐるの?」

そう言つてキャラを抱えあげる。

「逃げられると思つてゐるの?」

なのははとフュイトがそれぞれ待機モードのレイジングハートとバルディッシュユを取り出す。

「思つてます。では

そして、俺はスキマを開いた。

「ふ、サラバダー」

スキマに入る直前、キャロが言い残した。
サラダバー。

「うわー！ マジ焦つたー！」

スキマで元いた無人世界のログハウスに帰ってきた俺は安堵のため息を吐いた。

「実はさつきの縁髪の人にはマジでビビッてたショウヘイへーいでし
たとさ」

うっせ！

マジ迫力あんだもん。

笑つてゐるにさ。

さすが提督だね。

「ま、なのは達と出会えたのは良く考えりや 幸運だつたな」
会えないより会えた方が良いに決まつてる。
それがどんな状況だつてな。

何も知らないより、実際会つて何をしたかによつて今後とれる対策も考えやすくなるからな。

「とつあえず風呂にでも入つてよく考えよつ」

変な汗いっぱいかいたし。

「ほつ……私の背中と髪を洗いたいと申したか？」

「自分で上手く洗えないくせに何言つてんだか……まあ、洗つてやるからわざと用意しな」

「わーーー！ お風呂ーー！」

着替えを取りに駆けていくキャラだった。

俺は口つこんじやないぞ？

まだキャラには欲情していないからなー

7話（後書き）

ユーチューブでビデオしてたら昨日は3000近く!!.....マジ恐
悦。

しかも日間ランキンギング4位とか一回画面から田を逸らしてリアルに
二度見した。

明日は休みなんで連続投稿するやも。

「困つてる人を助ける……って、どうしたんですか、急に良い人ふつて」

これからについて、数口悩んだ末に出した結論を告げると、疑問を感じた表情をするキャロ。

突然だから意味が分からないのだろう。

それはいい……だが、最近のキャロはナチュラルに冷たいのだがどういうことだらうか。

「良い人ぶるつてお前……俺超良い人じやん」

「凄まじい妄想ですね」

「妄想じやねーし！ 事実だし！」

「まあ、どうでもいいですけど」

「お前、俺に興味なくね？
すつごいぞんざいなんんですけど」

「それでどういう風の吹き回しだすか」

お前、それじゃ俺が心から困つてる人を助けたいって思つてない
奴みたいじやないか。

ま、確かに打算的計画だけど。

困つてる人を助ける。

それを続けてればいつかは管理局の耳にも入るはずだ。
管理局的には自分達以外がそんなことをしてりや気に喰わないつて思うかもしない。

けど、それは管理局でも一部で、なのは達は𠂇と人助けして
俺達の話ならちゃんと聞いてくれるはずだ。

主人公組は、そのぐらいお人よしが集まってるからな。

それによつてこの前のように初めから怪しまれているような状態
にはならないはずだ。

もつと友好的に接してくれる……と思つてゐ。

そんな感じにキャロに説明して、

「つまり、これから管理局……というかあの人们に関わっていくに
はこれはとても重要なことなのです!」

といつ言葉で締めくくつた。

「色んなところに行けるんならそれはそれでいいですね」

方向性は違つみたいだけどキャロも別に嫌そうにしてないみたい
だ。

今、キャロに話した以外にも理由はある。

困つてる人を助ける……それは、きっと力を使わなきゃいけない
ことだつてあるはずだ。

今でこそこんな性格のキャロだが、なんだかんだ言つて原作と同
じように優しいところは残つてゐ。

そんなキャロが昔、自分の力が上手く制御できなくて人を傷つけ
たことを忘れてはいるはずがない。

だから、その力で人を助けられるつてことを教えて上げられるし、
原作までに実戦を経験しておぐいとは悪いことじやない。

俺だけてキヤロとの訓練以外で人を相手にしたことなんてないし、
今之内に経験しておきたい。

自分らのためにもなって、人に感謝されて（あわよくば謝礼なんかも貰えるかもしれない）、これからなのは達に関わっていくにもプラスになる。

いいことだらけじゃないか。

こんな素晴らしいことを思いついた俺は自分を褒めてやりたいね。

と、言つわけでやつてきました別世界。

スキマを開いた先、そこは小高い丘の上で、結構遠くまで見渡すことが出来た。

文明レベルは恐らくそんなに高くない。

ビルとか、そういう建物は見えないからだ。

ここが、この世界に於けるとんでもない秘境とかでもない限り、恐らくル・ルシエの里のあつたアルザス地方と同じぐらいの文明レベルだとと思う。

「ijiに困っている人がいるんですか？」

スキマから出たキヤロが荷物を地面に置き、周りを見渡しながら訊いてきた。

「そのはずだ」

多分、きっと。

スキマを開くときに『困っている人のいる世界へ行きたい』と思って開いたらここに繋がった。

スキマは結構便利だ。

前だつて『地球に行きたい』と思つたら海鳴に繋がつたのだ。
何で海鳴だつたのか。

それはきっと、ここがリリカル世界だと思つてた俺が『地球＝海鳴』だと心のどこかで思つていたからだらう。

だから多分、今回も同じで、きっとここには困つている人がいる
はずだ。

「ざつと見た限り……さつきの世界と違つて大型の生物は見当たら
ないな」

キヤロと同じように周りを見てみて、最初に思つたこと。

「これなら、この世界は人が住んでる可能性は高い」

人を齎かす生物が少ないので当然だ。

前の世界は多分、魔導師でもランクが低けりや戦えないし、そんな所で人が安心して住めるわけがない。

次元世界へ転送できる魔法があるこの世界。

地球のように管理局の管理外ならまだしも、管理世界であるならそこに住むメリットが殆どない。

「じゃあ、まずは人里を探すんですか？」

「だな」

「メンドクサイですね」

「おま、新しい門出にイキナリそれはないだろ」「う」

「門出だらうがなんだらうがメンドクサイ物はメンドクサイんですね。あ、私ここで待つてゐるんで探してきてください」

何、このガキ。

超やる気ないんですけど。

「ふざけるなよ……てか、スキマで人の居るとこひいて直接行きやい
いだろ」

「あ、そりでした。それホントに便利ですよねー」

ホントやうね。

「ふふふ、羨ましかるう?」

「羨ましいです。本当に足として良い人材ですよね」

「そうだろ、そうだろ…………あれ? それ褒めてる?」

「褒めますよ

「……………」

「移動手段として」

「なに? その歳で男を足呼ばわり…………だと…………?」

「そういうのいいですから、そりやとスキマ開いてください」

「あ、はい。分かりました」

キヤ口に顎で使われる俺だった。

8話（後書き）

あはははははははははは。

田間ランキング1位、週間13位……だと?

そんな……馬鹿な……。

てことで今日一度田の更新。

いつもの定期更新のためにもこれからまた書き進めます。

困っている人を助けよう作戦。
あれからまた一年程月日が流れていた。
原作開始まであと一年程。

「お二人とも、本当にありがとうございました」

村人数人に頭を下げられ、村を出る。

今回は違法魔導師による誘拐事件から村の子供数人を救出した。
俺もキヤロもこの一年で対人戦闘にも慣れ、難なくこの事件を解決できた。

この一年で俺達の事も大分知れ渡り、管理局の耳にも入った。
スカリエッティや最高評議会関連の施設はスルーしていたので指名手配とかにされることはないかった。
やつてたら多分、あいつらはなりふり構わず俺達を捕まえようと
するはずだ。

こんだけ知れ渡つたらそろそろいいかな？

「キヤロ、地球に行くぞ」

きっとなのは達も俺らの情報を耳にしてるはずだ。

なのは達が知らなくてもリンクトライは確実に知ってると思つ。

「まあや」のケーキとショーケリーム食べたいですー。」

思い出したのか涎を垂らさんばかりの勢いで皿を輝かせるキャロ。

「いいけど、前みたいに適当なこと言ひなよ。」

「適当なこと?」

首を傾げるキャロ。

「俺が怪しい奴だとか口リコンだとかみたいな」と言つたら、「全部本当の事じやないですか」

「違うわー!」

「だって最近、お風呂で私のこと見る視線がねつとりしてきました

「…………嘘だ」

「気付いて……ないんですか?」

いや、そんなことないはずだー!

「大体、一年前から大して体型変わってないじゃないか」

「…………カチーン」

怒つたことを口で表現すんなや。

「フリード、ゴー」

「キュークルー!」

「いいつ

キャロの声でフリードが俺に体当たりした。

「つーか、そんな風に思つてゐるくせに、それでも俺と風呂に入る」とをやめないとかお前、どんだけ俺の事好きなんだよ」

せめてもうちょっと成長してくれると嬉しいんだが。

「はい？ 勘違いも甚だしいですね」

まるで蔑むかのような冷たい視線。

「いやいや、いくら子供だつて嫌いな奴と一人で風呂なんて入らないだろ」

「嫌いじゃない=好き、ってどんだけ単純思考なんですか。私はシヨウヘルさんが他の子供に手を出す前に、せめてお風呂で私の髪を洗つことによつて発散させてあげているだけです」

随分饒舌じやないか。

「ただ単に一人で髪を洗えないといつ」

「う、うるさいです」

照れんなや。

ちょっと可愛いくと思つてしまつたじゃないか。

「ま、とにかく地球で変な」とこづなよ」

「スイーツ」

「諭吉一枚までなら食つて良し」

「任せてください。ショウヘルさんの素晴らしさを伝えてあげましょ」

現金なキャロだった。

「ところどりで、再び海鳴に俺はやつてきたわーーー。」

「きやつー?」

海鳴へスキマを繋ぎ、出たと同時に叫ぶと、すぐ傍で小さく悲鳴が上がった。

そちらに視線をやると、

「あ、あああんた なんでもまたアタシの前に突然出てくるのよーっ！」

飲んでいた紅茶を床に落とし、立ち上がりて此方を指差すアリサと、紅茶を両手で持つたまま固まっているすずかがいたのだった。

「なぜ居るじ

「ここはアタシの家よ！」

「なん……だと……」

なんでアリサン家に繋がつたんだ？

「……ケーキ

優雅にティータイムを楽しんでいたのだろう。

テーブルにはアリサとすずか、一人の分のケーキが用意されていた。

「アリサ……だけ」

「イキナリ名前で呼ぶとか……まあ、いいわ。何よ？」

「ウチの腹ペコ姫がケーキを所望なのだが？」

「知らないわよ！ いきなり人の家に来て何言つてんの！？」

相変わらずアリサはナイスシンデレだぜ。
ツンしかないけどな！」

「キャロちゃんケー キ食べたいの？」

「はい」

俺とアリサはスルーしてキャロ話しかけるすずか。

「はあ……仕方ないわね。ちゃんと話聞かせてもらひつから

そう言つてアリサは俺とキャロの分のケーキと紅茶を使用人に用意させた。

「で、なんでまたアタシ達の前に現れたわけ？」

新しく入れた紅茶を一口飲んでアリサはそう話を切り出してきた。

「聞かれても分からんがな」

「何で毎回アリサのとこに繋がるんだ？」

「まつー!? もじや俺とアリサは運命的な何かで結ばれてるのか!?

?

「運命（笑）」

殺すぞ、キヤロ。

「バカじゃないの?」

アリサも冷たい視線です。

「ま、冗談は置いておいて……なんでだらう。もしかしたら俺は無意識的にアリサを意識してるかもしれない」「な、何言つてんのよ!? バカじゃないの!?」

顔を真っ赤にするアリサ。

なんかさつときは『バカじゃないの!?』のニュアンスが違う。

「アリサちゃん……可愛い」

何か照れるアリサを恍惚の表情で見るすずかさんが怖いんですが。

「つたぐ、バカなこと言つてんじゃないわよ」

「そう言いながら紅茶のお代わりを入れてくれるとかアリサさん素敵すぎる」

「う、うるさいわね!」

何かアリサの態度が前と変わりすぎくて怖い。

「何かアリサの態度が前と違いますって怖いんだが」

あ、声に出てた。

何かアリサがビックリした表情で俺を見てた。

「そういえば……なんでだるづ、前に会った時と違つて全然嫌な感じが沸かないんだけど」

アリサがぶつぶつ呟く。

「これは……まさかホントに惚れられたか！？」

「妄想乙」

キヤロ、お前なんてコケちまえ。

なんて……理由は分かつてるんだけどね。

あれは困っている人を助けはじめて間もない頃だった。
管理局でもない俺らが力になると言つても中々信じてもうらない
ことが多かった。

何か企んでるんじゃないとか、実は犯人の一味なんじゃなんか
とか。

それでも強引に首を突っ込んで解決したりしたけど、でも出来ればやつぱり最初から友好的にしてくれるとスムーズに行くし変に疑われるよりよっぽど良い。

しかも、一番の問題はどれだけ事件を解決しようとも俺に惚れて
くれるような娘が一人も現れなかつたことだ。
助けた中には美人も結構居たのに、だ。

そこで俺は……解決法を模索した。

そして思いついたのだ。画期的な解決法を。

それは能力で“魅力”を上げることだった。

魅力を上げればオリ主特有のニコポができるんじゃないか、と思った。

だが、これは俺の想像を絶したね。

魅力を最大まで上げた俺はカリスマ性が溢れてしまつて会う人々

う人に揉まれたのだ。

そこで若干下げてみた。

揉まることはなくなつた。

しかし、今度は揉みくちゃにされたのだ。

それが若くて美人なら大歓迎なのだが……男も女も老若男女問わず揉みくちゃにされたのだった。

本気で恐怖したね。

若くて美人に抱きつかれたと思つたら次の瞬間にはガチムチのうつさんにガッシリとホールドされたりしたのだ。

これはいつも一緒にいて、俺の能力で色んな能力（抵抗力も含まれる）が上がつていてるキャロにも効果があつたのだ。

抱きつかれるわ、風呂に入れば息子を触られるわ。

まだキャロは欲情の対象外である俺もこれにはさすがに間違いを犯しそうになつたね。

我慢した俺を褒めてもらいたい。

そんなことがあつて、反省した俺は『初対面でも好意的に見られる程度』まで魅力を下げたのだった。

これで地球組対策もバツチリね！

9話（後書き）

何か前回、今回とちよつと長め。

それでも短いですけど。

前回アリサが登場したときと同じような終わり方……。

と、まあそんな訳で俺は他人から好意的に見られるようになつた訳だ。

「つーかさ、俺って初対面の時そんなに怪しかつたのか？」

あの時のアリサの突っかかり方は凄まじかつたからな。

「え？ …… そうね。怪しかつたわ」

即答だつた。

「なんて言つか…… 全身から怪しいと言つか胡散臭いオーラが漂つてたわ」

えー、心外なんですけど。

俺は確認の為にすずかの方を見たのだが、気まずそうに頷かれた。

「マ、マジかよ……」

「マジよ。普段だったらさすがにアタシもあそこまで言わないわよ

俺はそんなに怪しかつたのか？

あれ？

もしかして…… 魅力を操作するまで色んな人たちに疑われたりしたのつてその所為なのか？

モテなかつたのも、もしかしてそれが原因か？

そういうえば…… 元の世界にいた時も親しい友人なんていなかつた

な。

まあ、そのおかげで二次元の素晴らしい気付けたわけなんだ
じゃ。

そういえば……思い当たる節がないわけでも……ない?

「何唸つてんのよ?」

急に考え込んだ俺に、心配するような気配を纏つたアリサが話しかけてきた。

「ちょっと待つて! 今なんか凄い大事っぽい」と考えてるから

アリサの方に手のひらを向けて待つて欲しいことをアピール。

そういうえば……昔から疑われる事が多かつた気がする。

小学生では誰かが花瓶を割れば疑われたし、誰かの物が隠されたりした時も疑われた。

何かと疑われることが多かつた……。

初対面の人と話が弾むなんてことはまずなかつた。

苛められる事とかはなかつたけど、そういうこともあって俺は他人とあまり関わらないようになつた。

そういうえば……この世界に来てから人と話すのに抵抗がない?

キヤロだつて自然に自分が保護しようとか思い至つたりしたし、超絶美人な、それこそ元の世界では近寄りがたい高嶺の花的存在の原作キャラ達にも何の躊躇いもなく話しかけることが出来ている。

現実と創作物と知つているキャラという差はあるが、ここには間違いないなく今の俺の現実だ。大した差はないだろう。

なら、なぜ……本当は人と関わりたいと思ってて無意識にそういう能力をつかつてる、とかか?

「ねえ、貴方の保護者大丈夫?」

「何か凄い勢いで百面相してるね」

「どうせ大したこと考えてないので放つておいていいです。それよりケーキのお代わりはないですか?」

お前もちょっとは心配しやがれ。

創作物ではあるけれど『ある魔術の禁書目録』の主人公上条当馬は不幸体质と言つか不幸属性だつた。
そうすると俺は……本来、怪しい属性なんかをもつていたりしたのだろうか?

良く考えるとそうでも思わないと、あれほどの疑われようは理解できないな。

怪しい属性……なにそれ嫌すぎる。

ふと思つたけど……なんかおかしい。

今までは何故か全く考えなかつたけど、今こうして向こうの世界の事を考えても全くと言つていいくほど帰りたいとかいつ気持ちが浮かんでこない。

両親に会いたい……とも。

家族仲は悪くなかったはずだ。良くもなかつたけど。

旅行は家族みんなで行くし宿の予約も取つてあるつて言われたから着いていったけど、そういえばそういう状況でもない限りご飯とか皆揃うときぐらいしか会話もしなかつたな。

学校以外は部屋にいたし。

帰りたいと思わないのは俺の能力ならいつでも帰れると思つてゐらか、それともこっちでの生活が充実しすぎてるからなのか。

ん……謎が謎を呼ぶぜ。

「まあ、いーか。考へてもよくわからん」

今が樂しけりやいいじやん。

大体俺つてば能力があるから死なないし歳だつて自由自在。
慣れ親しんだからこのままだけどやうつと思えば外見だつて変え
られる。

不幸ではないが楽しいこともあんまりない現実と超充実してゐるこ
の世界、キミならどちらを選ぶ？

当然こっちだな。

「あつちじやこんな美人達と話せることなんてまずないし

「び、美人つて……」

「アリサちゃんはともかく私は……」

「ふふん、良く分かつてゐるじゃないですか」

お前はよく言つて美幼女だ。

口にクリームつけて不適に笑つてんじやないよ。

とにかく、ここは元々は創作の世界である。

美少女、美女率がパナいのである。

男として断然こっちが良いのである。

俺はカワイイ女の子とイチャラブしたいのである。

「だからアリサ、俺といチャイチャしょひぎ

「するかあ！」

何故だし。

「で、結局何を考え込んでたのよ？」

暫くして全員落ち着いたところで話を戻す。

「うん。何か凄く大事なことを考えてたはずなのに実はそうでもなかつたぜって結論に至った」

「意味が分からんだけ……」

「俺にも良く分かってない。けど今が幸せならいいよね？」

「良く分からないけど、幸せならいいんじゃないの？」

「そんな感じに落ち着いた」

やつぱり意味が……と悩むアリサを尻田に紅茶を口に含む。
「うむ、美味しい。」

「アリサはあれだね。ナンダカンダ叫んだって結局は少し話した程度の俺の事でも真剣に悩むぐらい良い人だよね」

「な、何を？」

「すずかさんもそう思つよね？」

「うん。アリサちゃんは優しいよ」

「うがーっ！ てか何ですすかは『さん』付けなのよー！」

「それは……なんかアリサはアリサですすかさんはすすかさんって感じだから」

「どういうことよー！？」

「それだけアリサちゃんが親しみやすいってことだよね。あ、それと私も別に呼び捨てでいいですよ？」

おうふ……笑顔が眩しいぜ。

「それはともかく、シンテレと親しみやすいってのは回路するのか？」

「アタシはシンテレじゃない！」

「いや、シンテレだろ。どう見ても」

「『めん、アリサちゃん。シンテレだと思つよ？』

「シンテレ」

イエーイと三人でハイタッチ。

「ソレには敵しかいない！」

アリサにすずかともかなり打ち解けることが出来ましたな！
よかつたよかつた。

次は魔導師組とくんずほぐれつ ゲフンゲフンッ！
魔導師組とも打ち解けたいのですな。

10話（後書き）

オリ主のシリアスな過去（笑）が発動。だが効果はすぐに消えてしまった！

しかし、このオリ主、シリアスが似合わないことに上なし。

ふはははは！

実は休み中に書き溜めておいた分はまだあるのだよー。てことで今日も2話投稿だぜ。

今日も、つてか予約だからまだ日付変わってないし変な感じですね。
そして10話達成！

「今はなのはもフュイトも地球にいない、か

あの後、アリサにそう聞いた俺は若干拍子抜けしつつ一人と別れた。

完全に今日、あの二人とそれから出来ればやても含めた三人と話をしようと思っていたのだが、三人とも忙しい管理局員だしそうそう地球に居ないよな。

ま、居ないなら居ないで前回出来なかつた買い物タイムと行こうか。

そう決めた俺はキャロと一人で歩いている。

「まず、服だな。服屋より本屋か」

一着ずつ買ひより雑誌を買えば、その本の中の服は全部創りだせるしな。

「いや、まずは前に行つたケー キ屋に行くべき

「お前……アリサン家で散々食つただろ。まだ食つのか？」

「甘いものは別腹つて良く言ひますよね

「さつきまで食つてたのも甘いものなんだが

「それはそれ、これはこれです」

まあ、やることもなくなつちやつたし、元々はアリサの家ではなく翠屋に行くつもりだったから良いんだけどな。

ため息を吐きつつ翠屋へと向かう。

そういえば……翠屋は軽食もあつたな。
俺はそつちにじよつ。

翠屋に着いた。

「君がなのはが話していた子連れの男性って人かな？　なのはとは
どんな関係なんだい？」

店に足を踏み入れた瞬間、数多くのオリ主を処刑場（道場）へ導
いていくラスボスが登場なさつた。

何か凄えプレッシャーを感じる……魅力操作が効いてないのか？

「あー……多分そうですけど」

「やっぱりそうか！　いや、ピンクの髪のカワイイイ女の子を連れて
ると聞いていたからもしゃと思ったんだがね」

店の入り口で話し始めた俺の袖をキャロが引っ張った。

「なんだよ？」

俺は『お話（OHANASHI）』フラグ回避に必死なんだよ！

「ケーキ」

キャロの視線はケーキが展示されたショーケースに釘付けだ。
俺の事なんかどうでもいいんすね……。

「あの…… とりあえず座つていいですかね？」

「おっと、 そうだったね。 では注文を聞いつか」

キヤロはケー キを数種類（多分まだ追加で頼む気でいる）。
俺は冷たい紅茶とサンドウイッチを注文した。

「お待たせ」

注文の品をテーブルに並べ

「それじゃ、 わたしの話の続きをしようつか」

俺の対面に座る高町士郎。
なのはパパである。

「話…… とは？」

「うふ。 君はなのはどどんな関係なんだい？」

凄い笑顔なのに有り得ない威圧感を感じる。

「えへっと…… 関係と言われても」

一回会つただけだし……。

ただ、あの時は魅力操作前、変に怪しまれている可能性はある。

「いやね、数日前に帰つてきたなのはが、『どうじとももう一度会つてちやんとお話ししたいの』なんて言つもんで気になつてしまつてね

「そ、 そうですか」

追い追われる関係ですなんて言えない……。

「あなたの娘さんが必死になつて追いかけるような関係です」

キヤロ ッ!!

「お、おま……何を……?」

「どうこいつ……事かな?」

はっ、殺氣!?

「いや、あのですね? 追いかけるといいましても……」

前回の出来事を話す。

俺とキヤロが魔導師だけど、管理局の魔導師じやないこと。
地球上に来たときにアリサ達に見られ、なのはにそれがバレたこと。
その事について色々と話を聞きたいというのはから逃げたこと。

「…………」

全然信じてくれてなさそくな顔をしていた。

「キヤロ、お前からも本当だつて言つてくれよ

「…………」

「キヤロ?」

返事をしない「どうか」から視線もくれやがらない。
キヤロは悲しげな瞳で自身の前に積まれた空の皿を見ていた。

「お姉さん！ ケーキ全種類追加で！」

俺はカウンターに居た高町桃子に大きい声で告げた。

途端

「今の話は本当です」

「そうなのかい？」

「はい」

士郎さんは『ふむ』と頷いてから、

「なんで逃げたのかな？ またウチの店に来たといつことは別に珍しい事がある訳ではないんだろう？」

「えへっと、ですね……実はキャロはですね」

俺はキャロと過ぐすことになった経緯を説明した。

「それで……管理局は万年人手不足なので……捕まつたら、俺はまだしもキャロも局員として働かされてしまつかもと思つたので逃げてしまつたんですよ」

実際はキャロをフロイドに押し付けようとしたことは黙つておいてそれらしいことを言つておいた。

「そりゃ……確かに、自分の意思とはいえ、当時小学生だったのはも普通に働かされていたな」

顎を指でさすりながら考る士郎さん。

「でも……それなら何でまたウチに来たんだい？」

「それは……後々考えたら、管理局はともかく娘さんは信用できぬうだし、ちゃんと話してみようかなって思いまして」「なるほど、分かった。君は中々の好青年のようだね。キヤロちゃんを引き取りちゃんと育てているのだから」

威圧感が消え、人の良さそうな笑みになる。

「ケーキ、お待たせしました」

と、そこで桃子さんがケーキを運んできてくれた。

「わ～い！ ありがとう、お姉さん！」
「どういたしまして。ふふ、こんなに素直で可愛い元気な子、悪い人に育てられるわけないわ」

嬉しそうにケーキを食り食いつキヤロを見て微笑む桃子さん。
素直で可愛い……？

元気なのは認めるが、素直で可愛い……だと？

「なんだ桃子。聞いていたのか？」

「聞こえたのよ。大きな声で話してるんだもの」

「それもそうだな！」

「ええ」

豪快に『はつはつはー！』と笑う土郎さん。
早くも桃色空間が出来つつある。

「それより残念ね？ 折角なのはに合いに来ててくれたのに、あの子またお仕事に行っちゃってるからいつ帰ってくるか分からないの」「忙しいみたいだからなあ。連絡もこっちからしないと全然してこ

ないんだ

自分で行つて自分で悲しくなつてる土郎さん。

「連絡……とれるんですか？ 地球にいなんですかね？」

まあ、向ひの世界の通信機でも持つてゐるんだらうけど一応聞いておく。

「ああ、なんだか別の世界でも使える携帯電話のやうなものを貰つてね」

「あ、そつだ。ちょっと連絡してみましょつか」

さう桃子さんが提案する。

「え、良いんですか？」

正直会えるまで何回も来るとかキヤロが太りそつなんで遠慮したいです。

「ええ、こじぢまちよつと使えないから着いてくれるかしら？」

「あ、はい」

「ケーリ持つて行つてもいいですか！？」

ショーケースの中のホールケーキを指差すキヤロ。

「ふふふ。それは後でね。ショークリームで我癒してくれるかしら？」

「はい。」

ショークリームをいくつか受け取るキャロ。何か恥ずかしい気分になつた。

「店員が誰も居なくなるのは拙いな

そう言つて土郎さんは接客に戻つていつた。

桃子さんに連れられ高町家のリビングへやつてきた。

「じゃあ連絡して見るわね

俺の前に通信機を置いて、桃子さんが操作する。暫くすると田の前にウィンドウみたいなものが現れ、その中にはのはの顔が映つていた。

「どうしたのお母さん。何があ

「やつほ

「ショークリームうまい」

なのはの言葉の途中で俺は画面に向かつて両手を挙げ、キャロは俺の隣でショークリームを食べていた。

「な、なんでえ つー？」

1-1話（後書き）

高町家訪問編。

また予約忘れちまつたぜ。

「な、なんでそここいるんですか？！？」

なのはが驚いたよう、自分の実家のリビングにいる俺達に質問していく。

「色々あつて、ケーキ食べに来たひつなつた」

搔い摘んで説明する。

「全然わかんないよつー？」

だろひつね。

「実は……かくかくしかじか、あれこれひつなつてひつなつた

「よ、余計わからぬ！」

「ケーキ食べてたらひつなりました」

「ケーキ！？」

なんだ……お前は腹ペコキャラでも田舎じとんのか？

「まあ、ふやけるのはこれべりこにして、簡単に元ひつと……」

「ひつまでの経緯を説明する。

「ちなみにアリサとすずかとは仲良くなつました」

実は連絡先も交換したんだぜ？

実は俺もキヤロもこの通信機を持っているのです。

今まで色々な世界に行って、使ってる人を見て良いなと思つて創つたのです。

でも今まで俺にはキヤロ、キヤロには俺、それだけしか連絡先が登録されてなかつたのです。

……淋しかつたのです。

なので、仲良くなつたので二人分の通信機を創り出してプレゼントしたのだ。

「なので高町さんもあの一人に連絡先を教えてあげれば喜ぶと思うのです」

「？……教えてるよ？」

「いっつじやなくて今使つてる通信機のです。一人も同じの持つてます」

「なえつ！？ いつの間に！？」

「俺がプレゼントしたからです。ちなみに連絡先は交換済みなのです」

まあ、そんな話はびりでもいいとして、本題。

「まあ、それよりも高町さん。俺達は高町さんに用があつてやつてきたわけですけども……」

「あ、そう言えばそづ言つてましたね。でも私……仕事で当分地球へ帰る暇がないんですけど」

「どううね。
どうするか……。」

「ちなみに高町さん、今ドコロ？」

「え……//シテですか？」

「//シテの//でですか？」

「……教導隊の食堂ですか？」

管理局の中か……それはマズイな。

「キャロ、//シテのケーキ屋に興味」

「ない訳がなかろうもん」

「あ、そうですか。……って事で//シテのケーキ屋に面るんで、出来ればフェイトさん連れて一人で来てください」では

「え、ちゅ、ケーキ屋つて//ゴー?」「

俺にもわかりません。

なのはの声を無視して通信機を桃子さんに返却する。

「よし、//でシテ//」

俺は//シテ（の安全な場所と信じて）へ向けてスキマを開いた。

キャロが指差す方へ歩く。

実は旅するよつになつてから分かつたのだが、キャロの感（主に自分の興味のある事についてだけ）が凄いことになつてるのだ。だから多分、キャロに着いていけばミシドでも一番と言つていいくらいに美味しいケーキ屋に辿り付けるはずだ。

「あ、最初からミシド一番のケーキ屋にスキマ開けばよかつたかも」

ま、初めてのミシドを眺めて歩くのも良いかもしない。

ケーキ屋はすぐ見つかった。

店に入つてすぐにキャロは数種類注文して、店内に備え付けられているテーブルで食べ始めた。

俺はもう甘いものはいらないので飲み物だけ買って同じテーブルに座り、ここに来るまでに買つておいた地球とミシドのファッション雑誌を眺める。

「お、キャロ、これ着てみない？」

俺は即ちまたページをキャロに見せる。

「……変態ですか？ それ日常で着るつてありえないです」「はあ？」

俺がキャロに見せたのは子供っぽくもあり夏らしいもある可愛らしいワンピースだったのだが、キャロの反応がおかしい。

「大体、私にそれが着れるとでも？ 嫌味ですか？ 死にますか？」

俺は雑誌を自分の方に向け確認する。
その理由がすぐに分かった。

「違えーよ！ 誰がお前のビキニ姿なんか見たいよー？」

それは俺の見たページの隣のページが水着特集の表紙で、グラビアアイドルばかりのモデルさんが海をバックにビキニで写っていたのだつた。

キャロはワンピースではなくこっちが目に入つたようだ。

だがキャロにビキニはない。

まず下はともかく、上は支える物がないからポロリが確定だ。

それはそれで有りかもしけんが、キャロなら絶対的にスク水系だろうが！

あつ、隣のページと掛け合わせてワンピースタイプも捨てがちな。

「それはそれでムカつく物言いでですね」

「ビキニはまだ早いつつの。せめてあと五年は成長してから言え」

あれ……？

五年後のキャロで……着れるか？

「凄い失礼な事考えてる田で見てますね」

「……あと七年は経つてから言え」

「一年増やした……だと？ ふざけてますね。五年後覚えてやがれ
です」

はっ、五年後ここんなんが着れるよつになつてたら俺がプレゼン
トしてやるよ。

是非着てくださいって土下座してなー

男らしくない？

そんなことない。だってキャラ口だぜ？

確実に美人に成長することが分かりきつてるんだぜ？

それでビキニが着れるような体型になつてるんだぜ？

見る為に土下座ぐらうするだらうがー！

まあ、キャラ口がそんなグラマラスボディ（笑）に成長するとせ思
えんが。

確か漫画版では十四歳でもペッタソーダだったはずだ。

「おお、楽しみにしてやるよ」

「く、何ですか、その哀れみのこもった眼差しは……」

残念だよキャラ口。

お前に勝ち目はないのさ。俺には原作知識があるからな。

さらに俺の能力があればお前をフロイトやシグナム以上のボディ
にしてやれるんだけどな……絶対しないけどな！

そのままのキミでいて欲しい……俺はそう思うのです。

「いつまでもスク水の似合つキャラ口でいて
殺しますよ」

おお、怖い怖い。

そんなこんなでキャロと一人、和気藹々と過ごす」と数時間。カラコンクロトンと店の扉が開かれる。

「や……やつと、見つけたの?」

「場所くらい……聞いておいつよ、なのは」

入ってきたのは息を切らしているなはとフロイトだった。

「やつと来たね。お一人さん」

「やつと来たつて……どれだけ探したと思つてるんですか?」

なのはがちよつと怒つていた。

「いや、俺もどこのケーキ屋に行くのか分からなかつたし、そもそもモニッシュに来たのは初めてだし。まあ座りなよ。疲れただろ?」

俺は一人に座るよう進める。

「疲れただろ?……って、誰の所為だと思つてるの?」

と言ひながらなのはが座る。

フロイトもなのはの隣に座つた。

「まあ、まずはお疲れ様と言つておつか」

「おつかれ」

俺とキャロがそれぞれ言いながら片手を挙げる。

「なんだろ? すつ”j”べムカツツの」

「なのは 私もだよ」

一度目の出会いも最悪だった。

あれ 僕、一人と仲良くなようと思つて来たんじゃなかつたつ
け?

1-2話（後書き）

一話使ひ切らうと出会えたところ。

既にもう一つの連載と、お気に入りと総合が同じぐらいになつた。

「今日はお話をさせてくれるんだよね？」

店内に現れてから暫くして息を整えたなのはが、俺達と同じテーブルについて言った。

「うん。じゃなかつたらわざわざ会こよ来ないし」

なのはを見ると探し回らされたことに若干怒りていのもの、前回会つた時よりも表情が柔らかく見えた。
警戒心も薄そうだ。

フロイトも同様だつた。

腰掛けで紅茶を飲む、それだけで絵になるつてどういふことだよ。

「てか、一年前に一度会つただけの俺が良く分かつたよね」

「うちは原作つていう形で知つてゐし、アリサは出会いからしておかしいし一度田の登場も一度田と同じだつたから分かりやすい」と思つじ。

それに比べなのはなんて年中事件追つてるようなもんだからあの程度のこと慣れてるだろうしな。

「そりゃあ…………一度会つたら忘れないの

なんだと?
その言い方……まるで……

「まさか……俺に惚れてる?」

みたいなじゃないか?

「そんなわけないの」

すつごい冷静に言われました。
てか表情がなにっこつこつことを書つか、と初めて知りました。

さすが悪魔呼ばわりされるだけのことはあるぜ。

「あんな逃げられ方したんだもん。忘れられないよね」

フロイトが苦笑する。

苦笑ですら美しい。

フロイトさんマジ天使だし、これ。

「フロイトさんマジ天使」

「ふえつーっ」

真っ赤になるフロイトがマジで可愛い。
なにこの娘、持つて帰りたいんですけど。

「あ、やべ、つこうかりくちだしちゃったぜー
「うわーめぢやめぢや棒読みだー引くわー」

お前もな。

つーかお前ホントに何でも返せるな。芸人にもなつた方がいい
よ、もづ。

「眞面目に話して欲しいんだけどな」

ふやけていると笑顔だが完全に田が笑ってないのはがしゃつかつた。

なのはせかそマジ悪魔。

「なのはせかそマジ ハー？」

慌てて口を塞ぐ。

これはつこいつからド直ويてしまおひものなり死亡フラグになつてしまひ。

「マジ……なんですか？」

じ、じりある、俺。

「なのはせかそマジ女神つて言おひと黙つたんですよ、ええ。ホント女神のよひにお美しいですよね」

とつあえず褒めて褒めて褒めまくれー。

女が怒ったときは褒めるか謝るかだつてどいつも聞いてたことある気がする。

「そ、そりなんだ。なんだ！ 変なこと言おひとじつのかと思つちやつたよー！」

なのはも褒める言葉には弱かつたらしく。耳まで真っ赤だった。

「なのは……」

なんかフェイトさんは俺が誤魔化したってのに薄々気付いてるのか生暖かい眼差しでなのはを見ている。

誤魔化しだけど、なのはが可愛いのはマジ。
さすが主人公。

少しごらい悪魔的で暴力的なお話するからってそんなのマイナスにならないぐらいのレベル。

これだけ可愛いのに『美しい』って言われただけで真っ赤になるとか……言われなれてそうなもんだけどな。
あ、綺麗すぎて近寄りがたいくて感じなのか。
なるほどなるほど。

「まあ、とりあえず自己紹介からでもしますか

話を戻す。

うん、自己紹介って大事だよね。

お互いを知ることは話をする上でとても大切だと思つ。

「俺は浅月翔兵。好きなタイプはフェイトさんです」
「ええつ！？」

急に言われてフェイトがうろたえる。
そんなんを見るだけで萌える。

「高町なのはです」「フェイト・T・ハラオウンです」

何か合コンみたいになつた。

「キャロ・ル・ルシエです。好きな泳法はバタフライ。嫌いな泳法は平泳ぎです。ケーキがあれば食べます」

意味わかんねえから。

つか泳法つてお前……泳いだことないだろ。

しかも最後の『ケーキがあれば食べます』って血口紹介じゃなくね？

あ、ちなみにキャロは原作同様、ル・ルシエを名乗っています。

「そ、そりなんだ」

なのはが苦笑している。

「ビ、ビウして平泳ぎが嫌いなのかな？」

「んなふぞけた自己紹介でも健氣に会話を広げよいつとすのフロイトはホントに天使じやなかろうか。

「え、だって卑猥じやないですか」

「ひ、ひわいっ！？」

「……」

予想外の返答にフロイトが再び赤く染まる。なのはも固まっていた。

平泳ぎが卑猥つて……お前、全国の平泳ぎ選手に謝れ。

「あの、ここつて事はほつとこで良いんで話を進めましょ！」

キャロの血口紹介を一々聞いていたら埒があかん。

「えつと……良いんですか？」

「足早く回復したのは。

「良いんですね。ケーキでも食わせときや大人しくしますから」

そう言つてケーキを追加で注文する。

「こいつ今日一日でどんだけケーキ食つんだろう。

明日から当分甘いもの無しだな。

「ふん、ほつとくとか言つのは氣に食わないんですけどケーキには罪はないので、まあ許してあげましょ」
「そりゃ、どうもありがとうござりますね」

生意気なことを言つてケーキを食べだすキャロだが、ほつぺにクリームがついてるのを見てなのはもフヨイトも何か微笑ましそうにしている。

「ひひこひこひだけ見れば子供らしくて可愛いんだけどなあ……普段の言動の所為で台無しである。

「あ、やつ言えば俺らの事知りません?」

自己紹介を終え、聞いてみる。

「へ? そりゃあ知つてますけど……前に会いましたし」

まあ、今のは俺の聞き方が悪かつた。

「やうじやなくて、色々してゐ一人組みつて」と何か思い当たり

ませんか?」

俺がそつ言つと一人とも考え込む。

「あつー!」

少ししてフロイトが声を上げた。

「そう言えば……」ここ一年ぐらいで誘拐グループとか犯罪者を捕まえたり、魔法生物とかで困つてゐる世界を救つたりしてゐる一人組みが、確か黒髪の青年と帽子をかぶつたピンク髪の少女

やつぱり管理局にも名前知られてたか。
いやあ、色々した甲斐がありましたな。

しかし、知られてるのは予想通りだけど、いざそんな風に言われると照れるもんだなあ。

「それが俺達なのです」

俺は自分とキャロを指差して言つた。

「え、ええーー?」

フロイトが驚く。

「え、え? フロイトちゃん、それホントなの?」

どうやらなのはは知らなかつたらしい。
教導隊で忙しかつたのかな?

「田撃情報からすれば多分そうだらうけど……」

フロイトが言つよどむ。

「どうしたの？」

「私も聞いただけだけど、助けてもらつた人達はその人達のことを『凛々しくて、まるで英雄のようだつた』って言つてゐるらしいから……」

「……そ、そなうなんだ」

「ん？」

あれ……もしかしてホントにお前か、ってこと?

「英雄」

「凛々しい」

俺とキャロを交互に見る一人。

「キリッ」

凛々しくねーから。

口にクリームついてるから。

「お前、凛々しくも英雄っぽくもねーから。ただの幼女だから。
…キリッ！」

凛々しいってどつちかつてーと俺、だろ?

「ふ」

笑うなや。

1~3話（後書き）

1話使って自己紹介だけとか。

こんな感じの話ですがこれからも宜しくお願いします。

「英雄云々は置いといて、多分それは俺達で間違いないはず
いい加減話を進めようじゃないか。

「まあ、これで俺達が犯罪者じゃないって信じてもらえますよね?」

そのために頑張ったんだもの。

「ええっと……そうですね」

なのはが頷く。

「でも……聞くといひになると施設の破壊とかしてるみたいで
すけど」

フロイトが言いにくそうに話し出す。
施設の破壊か……心当たりあるわ。

うん、何箇所か壊したね……キヤロが。

犯罪グループの施設つて分かつてたし、被害者救出後の犯人制圧
だつたからキヤロがいつもの甲羅を振り回して暴れたんだけじ。

「細かいことはいいじゃですか

言わないでおけ。

「いや細かくは……一応犯罪ですよ?」

え、マジで？

「犯罪者のアジトだから別にいいんじゃないの？」

「だ、駄目ですよー！」

なのはが言ひ。

「え、だつて高町さん……もうなのはさんでいい？」

「あ、はい。いいですよ」

「じゃあそう呼びます。なのはさんだつて極太レーザー魔法砲撃良くぶつ放してるじゃないですか」

「ご、極太レーザー魔法……何か、凄い嫌な言い方なの……」

「あれつて結構周り破壊してません？」

「してません！」

あれ？ そだつけ？

壁抜きとか完全に破壊じゃないのか？

ああ、脱出とかのためだから仕方ないんだな、きっと。

「俺達も脱出の為に仕方なく破壊したんですよ」

「え……地上にあつた結構大きな建物が全壊してたらしいんですねど」

フロイトさん聞いただけつて割には結構詳しつすね。

執務官だし、スカさんのこともあるし、そういうのは結構調べてたりするのかも。

「全壊と言えば……全力全壊」

「スターライトブレイカー、ですな」

ナイス、キャロ。

「へ、変なこと言わないでっ。」

怒るなのはだった。

「うう、全然話が進まない
「なのはファイト！」

落ち込むのはを励ますフェイト。
凄く……他人事です。

「フェイトちゃんも頑張つて！？」
「！」、「めん」

しゅんとするフェイトになのはが強く言い過ぎたとあたふたする。
微笑ましい光景である。

「まあまあ、一人とも落ち着いて
「だ、誰の所為だと思つてるのかな？」

え、俺の所為なの？
まあ俺の所為なんですけどね。

「そ、そりこえば……浅月さんは」
「翔兵、もしくは、ショウヘーでいいよ」

フェイトが何か聞いたそうな表情で話しお出したところを俺が遮つて提案する。

「えつと、じゃあ翔兵さんはキャロルちゃんを保護してましたよね？」

やべっ、お前で呼ばれるとか想像以上にドキドキするわ。

「まあ、やうですね」

「えつと……仲、いいですよね？」

「へ？」

ん？

何か話が全然違つ方向に進んでるわ。
いいけどね。

「仲……良じの？」

俺はキャロに尋ねる。

「シラウベーさんは私ひとつ……」

お前にとつて……なんだ？

「二ンジンです」

「嫌いって事が！？」

お前二ンジン嫌いだもんな！
なんだよ、泣くわ。

「しかし二ンジンはカレーにはなくてはならない大事な物だと思います」

なんだよ、照れてんのか？

好きなら好きって素直に言えよ。

「まあ残しますけど」

「なんなんだよおーっ！」

「ちよっと喜んだ分ダメージでかこよー」

「でもキヤロットケーキなら食べます。ヒツカ好きです」

「なんなんだよー！」

「どうせまたオチがあんだろ！？」

「言つてみろやー！ 僕はもう期待しないぞー！」

拗ねはじめた俺の肩を叩くキヤロ。

「…………」

キヤロを見る俺。

キヤロは慈愛に満ちた眼差しで、

「キヤロシッタケーキ」

親指を立てた。

「うおおーん！ キヤロオ ッ！」

泣きながら抱きしめた。

「くへそ、お前、くへそ……すこません、キヤロットケーキをくだ

ルート

俺は店内に響く声でキャロットケーキを注文した。

「やつぱつ、仲良いですよね」

一部始終を見たフェイトが呟つ。

「ま、悪いとはいえない」

悪かつたら四六時中一緒にほいれないうだろ。

「…………あ、あの！」

少し黙つて何か考えていたフェイトが意を決したかのよつに声を上げた。

「ど、どうすれば子供と仲良くなれますか？ キヤロちゃんと同じくらいの男の子なんですか？」

それは……もしかしてエリオのことか？
あれ……仲悪いの？

「あの、キヤロちゃんみたいに笑ってくれないし、表情も少ないし
……私、保護者失格なのかな」

何か勝手に落ち込みよる。

コレは……慰めフラグか！？

「子供と仲良くですか」

「はい」

「そんなもん遠慮しないで思つたよつて行動すりや良いんですよ。
俺なんか最初、キヤロを巨大生物の前に置き去りにしましたもん」

「…………はい？」

あれ、なんかミスつた？

フュイトさんの顔が怒つてゐるよつて見えるんだけど。

「な、なにしてるんですか貴方は！　虐待じゃないですか！」

おうふ……完全に怒つてゐるよ。

「え、だつて……」

「だつて、じゅありますんー！」

怖い。

怖いけど美人。

メチャメチャ美人。

「でも、じんなに元気に育つてますよ？」

「そうかもしけないですけど、そんな危険な」としたら駄目に決まつてるじゃないですか！」

フュイトさんによる説教が始まった。

「なのはさんなのはさん

「……なんですか？」

「俺、なんか拙いこと言つた?」

「はあ~」

ため息吐いてないでどうにかしてよ。

「その時は良かったかもされませんけど、もしもキャラクターやさんに何かあつたらどうするんですか!」

机をバンッと叩く。

「それないです」

断言する。

いやとなつたら助けるし、回復だつて出来る。

「確かに大怪我したことはないですね」

キャラが珍しくフォローに回つてくれた。

「だよな」

「何度か殺してやるうと思つたことはありますけど」

「マジで!/? 初耳なんだけども」

「でもまあ……そのおかげで制御できなかつた自分の力が制御できるようになりましたし、感謝は……そこはかとなくします」

そこには素直にじりよー。

「キャラちゃん」

「だから、その男の子にもフォイトセラがしたことによつてあげて

ください。困つたり照れたり嫌がつたりしても

「で、でも、嫌がつてゐるんだよ？」

「少しごりご強引に言つた方がいいんですよ。家族になりたいなら

「キャロ……お前、何でまともなことを。

成長、したな。

「キャロ……お前……俺の事、家族だと思つてくれてたんだな」

泣けてくるぜ。

「はあー…べ、別にそんなこと思つてないですよー。」

「照れるな照れるな」

「いの、可愛い奴め。

キャロの頭をグリグリ乱暴に撫でる。

「て、照れてないです。でも、気持ち悪いキャラつかいでください」

「はつはつは

素直じやなこのお。

いつも生意氣なくせにそんな風に思つてたとか、お前レベル高え
な。

「…………」

しばし呆然と俺達を見ていたフロイト。

「よしー、私もヒリオとこっぱこ語じてみます。やつたこよつこや
つてみます」

何かを決意し宣言する。

やつぱつHリオのことだったか。

「やつと決まれば早速… 色々参考になりました。ありがとうございます。」

立ち上がるフロイド。

「待ってねHリオ！」

凄まじい勢いで店を飛び出すフロイドだった。

「…………フH、フロイトせん……え、何この状況

なのはははは混亂してーN。

14話（後書き）

フロイトさんと子育て談義。
なのは中盤空気。
キヤロがまとも。
の三本でお送りしました。

総合評価が2000ポイント超えました。
ありがとうございます。

「……フロイトちゃん」

フロイトの出て行つたドアを見つめ呆然とするのは。

しかしフロイトはエリオに何する気なのかね？

今後もフロイトの子育てについての相談には乗つてこない。そこから何かが始まるかもしれないし。

同じ話題があれば仲良くなりやすいし、精々困った君でいてくれ、エリオ。

それだけ相談される可能性が増えるんだから。

「なのはさんなのはわん」

それはともかく……今の内になのはを攻略してしまおう。

……。

勿論、恋愛的な意味じゃないよ？

「なのはさんって無茶する人でしょう？」

「え？」

ビックリしたように口を見開くのは、

「な、なんでわかったのー？」

「俺だから」

だんで一に笑つてみる。

「お・れ・だ・か・ら」

机をバンバン叩くキャロにムカつく。

「冗談はおいたって……結構無理してない？」

原作知ってるからなのはが無茶する奴だったのも知ってるし。昔、ガジュットに落とされたことも知っている。確か、それがあつて色々制限されてるはずだ。全力出せないとか。

「え、えっと……そんなことないですよ?」

誤魔化そうとしてるのか無理に笑う。

「いやいや、実は身体結構ボロボロだったりしない?」

「そ、そんな……！」とは……」

「あらでしょ」

「う、うう……」

俺の言つてることが当たつてると、なのはは段々シウンと俯いてしまう。

「俺、なんとか出来るよ」

「…………はい?」

「俺、それ、治せるよ」

なんか片言みたいになつてゐる。

まあ、ある意味自分の能力の一部を見せることになるから緊張してるつてのはあるけども。

「ほ、ホントですかっ！？」

「おう……食こつきが半端ないぜ。」

「そんなに全力全壊したいのか……なのは、恐ろしいナ。」

「ホントだけど……俺達のことなんとかしてくれるなら治してもいいよ」

「なんとか……つて、どうすればいいんですか？」

「お、ちょっと遙りこでる？」

「てか俺、性格悪くね？」

「ほんなんじや……フラグ、立たなくね？」

「もしかして、無償で治療から惚れたのコンボとかあった？」

「つかつ！ 勿体無いことした！」

「いや、前から語つてゐる通り、管理局関係を向とかして欲しいんですよね」

「ひなつたひめ、ひめ行つてやるわー」

「……それは」

「基本的に自由に生きたいんで管理局入りは避けたいんですよ、俺は。あ、キヤロは別に良いですけど、フヒイトさん子供好きそうだし彼女に預けるのもいいかもなあ」「……」「おい」「あ、なのはさんでもいいんですけど、コレ要ります?」

「がぶっ」
キヤロを指差す。

「がぶっ」

「こつてえ　つー！」

噛まれた。

「何すんだよー！？」

「そこに指があつたから噛んだだけです」

狂犬か！

「あ、あはは……ちよっと、遠慮します」

でしょうね。

「そんな訳で俺達を勧誘しようとか調べようとか辞めてもうらえると
ありがたいんですけど」「でも、それは……」

「おつと……それだけではあれでしょうから、なのはせんやフヨイ
トさんの個人的な頼みとあらば何かのお手伝いぐらいできると思いま
すよ？まあ、外部協力者のようなものと思つてくれればいいで
す」「

勿論、全く関わるなと言つてしまつと原作の皆さんと仲良くなる
機会がなくなつてしまつのでフォローも忘れない、俺偉い。

「でも……」

「局員では出来ない」と……あると思いませんか？」

「うう……私一人じゃ……」

頭を抱えて悩みだすなのは。

「一人じゃ決められないというのなら、この人にも一緒に考えてもらいましょう」

俺は通信機を取り出し、俺とのはの間に置く。

「話は聞かせてもらつたわ」

「……リンディさん！？」

ウインドウが現れ、そこに映っている人物はリンディ・ハラオウン。

それに驚くのは。

「な、なんでリンディさんが！？」

「実はなのはさん達がこの店に来てすぐぐらいから、俺達の話は全て筒抜けだつたのだ！」

「な、なんだつてえー？ てか私も知らなかつたんですけど」

「言つてないもの

無言でポカポカ叩いてくるキャロ。

「殴るな。ま、管理局が相手だし俺達のこともちゃんと話そつと思つてたし、管理局のお偉いさんの中でもリンディさんはまだ話が通じそうだしな」

まあ、他にも……本人を目の前にしたら色々言いくるめられて管理局入りさせられそうだし出来れば全部ここで済ませてしまいたいつてのがあるけど。

「そもそも、いつ連絡先知つたんですか。私は知らないですよ」
「何かリンディさんに繋がつたらいいなと思つて適当に操作したら

繫がつた

「相変わらずぶつ飛んでますね」

「褒めんなよ」

「照れんなよ」

「……あの、いいかしら?」

俺とキャロがじゅれあつているところ、トトロさんが話に割って入つてくる。

「先程の話、なのはさんを治せるといつのは本当かしら?」

「マジな話、本当です」

「手伝いといつとは囁き魔導師といつとぞ思つのかしら」

ふ、さすが提督、少しでも管理局有利にことを進めたいとみえる。

「いえ、それでは管理局に所属したくないといつ此方の意見が通つてないです。あくまで個人的な手伝いです」

「それは……難しいわね」

「俺達が手伝いたいから勝手に手伝つてゐる。別に管理局に報告しなくてもいい戦力。それつて『この先』では役に立つと思いません? 例えば保有制限、とか」

機動六課ではそのやりくりに色々手を回して大変だつたはずだ。

「あなた……なにを、いえ、どこまで知つてのかしら?」

「さあ? ただ次元世界中を旅してると色々な話が耳に入るんですねよ」

「管理局に……敵対の意思はない、のね?」

「ええ。リンディさんやなのはさん達には全く

「なにか含みを感じるんだけど」

「管理局も一枚岩じやないつて事ですよ」

スカさん関係以外で、俺達が解決した事件の中にも少なからず管理局が関わっているものがあった。

まあ、それで俺達を指名手配するほどに大きなものではないが。

「なるほど……分かりました。その条件を呑みましょ」

「ありがとうございます」

「それで、なのははさんの事、本当に治せるのね?」

「間違いなく。な、キヤロ」

俺はキヤロに視線を向ける。

キヤロの前で怪我を治すとか、キヤロ自身の怪我も治したことあるしな。

「はい。それは間違いないです」

「そう……。お願ひして、いいかしら?」

「勿論ですよ」

「それじゃあ、またじっくり話したいから地球に来たらウチに来てくださいね」

「ツコリと微笑むリンティさん。

それは……お断りしたいです。

「フヨイトも貴方に相談したいことがあるでしょうしね」

「甘い物でも持つて是非お伺いさせていただきます」

「そう、嬉しいわ」

あ、乗せられた。

「バカですね」

絶望の表情を浮かべていると冷ややかな視線で俺を見下しながらキヤロが言つ。

「それじゃあ、お待ちします」

「わかりましたよ！ あ、なのはせんぬしますけど見られたくないんで通話りますね！」

「え、あ、ちよ 」

何か言つてたが切つた。

それでリングティさんとの通信は終わつた。

「それじゃ、いきまよよ」

「……はいっ！」

なのはに向かつて手のひらをかざす。

実際、この行動に意味はないんだけど、それっぽく見せるためだ。

「これは……なかなかボロボロだ

わかんないけどね。

手をかざしたら分かるってどんなんだよ。

「こわます」

能力を使う。

自己治癒力、回復力、生命力とかそれっぽいのをいくつか上げた。

「終わりました」

「へ？ もう、ですか？」

「うん。もう終わった」

「は、早いですね」

「ま、まあね」

何かシチュエーション次第では言われたくない言葉だなあ、とぼんやり考える。

考えてしまったことで無駄にダメージを負つてしまつた俺がいる。

「一応、半年から一年ぐらいは無理しないように。それだけ我慢すればあとはリリカルマジカルだろーが全力全壊だろーが好きにしてください」

「にや、にやあああああ！ な、なんで知ってるの…？」

「リリカルマジカル！ 魔法少女」

「リリカルなのは、始まります」

俺とキャロがキリッの顔で言つ。

「うにゃああああああっ！」

真っ赤になつて叫ぶなのはであつた。

15話（後書き）

取り引き回。駆け引きとは言えない。

主人公頑張った、超頑張った。

こういう会話は難しい。

キャロに噛まれた指はふーふーしたあと主人公が美味しく頂きましたとさ。

なのははと別れ、無人世界にある自分の家へ帰ってきた。
家に入るなり、俺はソファーにダイブした。

「あー、疲れた」

肉体的にじやなくて精神的にね。
やっぱ俺、駆け引きとか向いてないわ。
適当に生きていたい。

ただ……あの後、一時間ほどキャラロと一人でなのはを弄り倒した
のだが、真っ赤になるなのはが可愛かった。

あれは弄り甲斐がある。
悪魔とか嘘のように可愛らしかった。
あんなのはなら大歓迎だ。

「とりあえずの目的は果たしたし……これからどうするかな

正直言えば、困ってる人を助けよう計画はもつても意味がない。
原作まで、あと一年ぐらい。

「何しよう?」

よく考えるとやることないぞ……。

キャラも性格は原作とかけ離れちゃったけど力は制御できるようになつたし、俺は俺で自分の能力も大体把握した。

……マジでやる「こと」がなくなつた。

じりじょ。

「キャローラ、何かこれからやりたことあるー？」

もう考えるのも疲れてきたのでキャロに訊いてみる。
キャロはソファーにうつ伏せになっていた俺の横に座っていた。
あんまりにしたことないけど、そう言えばいつもこのぐらこの距離
にキャロがいることが多い気がする。

だからなんだって話だけ。

ちょっと気になつただけだから意味はない。

「暴れたいです」

キャロが答える。

戦闘狂か。

「却下」

「じゃあ、もうお風呂入つて寝たいです」

うん。そうだね。
お腹一杯食べたもんね。

「あほ。今したいことじゃなくてこれからしたいことだよ
「あほとはなんですか。お腹一杯で眠いときこいつ考えなんて出来
るわけないです」

おお、そう言われればそんな気もする。
でも俺はお前と違つてお腹一杯じゃないけどな。
俺は話してあまり食べてないんだよ。

てか、そもそもケーキばかりそんなに食えるか…

「だから寝ると奥」と思こます」

なんかホントに寝そづぶかふらんちやしてこる。

「わかったよ……まあ急いで結論付ける」ともないし
「そうです。それがいいです」

「とりあえず寝る前に風呂入って歯磨けよ」

「入りまか」

ボーッとした様子でのろのろ動くキヤロを見ていでいつも危な
つかしい。
俺も疲れているが仕方ない。

「よつ……ヒ」

立ち上がる。

「ほり、行くぞ」

「はい」

キヤロの手を引いて風呂に向かった。

「さて、一晩寝て、頭はハツキリしたかね？」
「なんですか、その口調は。似合ひませんよ」

キヤロ絶好調。

「……まあ、今の発言は聞かなかつたことにしてやるわ」「そんなこと言つて、今まで何を言つても怒つたりしたことないですか？」

だつてお前、本当に嫌なこと言わないし。

それに幼女は愛でるものであつて傷つけるとか俺には出来ない。幼女にひどいことなんて出来るわけないじゃないか。

「……なんかバカにされた気配がするんですけど」「何をばかな……バカにするなんてとんでもない」

幼女は素晴らしいものだよ。

最近、幼女から少女にシフトチェンジしつつあるキヤロだが、少女もまた素晴らしいものなので関係なかつた。

だが、まだ欲情はしていない。

それだけは信じて欲しい。

俺はまだキヤロに欲情していない。

「何か眼つきが気持ち悪いんですけど……まあ、とりあえずいつも通りでいいんじゃないですか？」

気持ち悪いとは何事か。

「いつも通りつて……困つてる人を助けようの念?」

「お助け戦隊、タスケンジャー」

「なにそれ、ダサい」

しかも一人なのに戦隊で。

そういえば最近、地球の戦隊物一緒に見たなあ。

「へ、ひみわい」です

顔を赤くするキャロ。

「でも、お前そんなに乗り気だったつけ？」

「別にどうでもいいんですけど……お礼に色々貰えるじゃないですか？」

確かに今まで色々貰つたな。

「あ、そう言えれば……」の前、お礼にケーキ貰つたけど。お前……
もしかして

「あ、行きませうか！」

図星だつたのか、話を無理やり終わらせるキャロ。

「いいんだけどね

キャロがやる気で他にやることなんてないんだし、断る理由がない。

「何してるんですか！ 行きますよー。」「はこはい」

そして、いつものように困つてゐる人のところへ行けるように諒じながら、俺はスキマを開くのだった。

繋がつたスキマから出る為に、スキマを開き始めたとき、外から
なにやら話し声が聞こえてきた。

「危険です！ 下がってください！」

「いや、しかし、これは面白い現象じゃないか！ 私はこんな魔法
見たことがない」

何か言い争つてゐるんだが……何か聞き覚えのある、いや～な予
感のする声なんだが。

「ですが、何があるか分かりませんのでお下がりを。チンク！」
「ドクター、後ろへ」
「仕方ないね。トーレ、なるべく壊さないように頼むよ」
「善処します」

何か凄い嫌な単語がいくつも聞こえたんだけど。

「何してるんですか？ 早く開けてください」

スキマを開くのを躊躇つていると、後ろからキャロに急かされる。

ええーい！ 男は度胸！

俺はスキマを一気に開いた。

「なつ！？ 人間！？」

驚いているのは田の前、一メートルも離れてない位置で紫色の羽『インパルスブレード』を構える紫色のショートカットの女性、トレ。

「ほつ、面白い。あれは転移魔法だったのか……いや、見たところデバイスを持つていない……ということは、レアスキルの一種かな？」

「ドクター、ぶつぶつ言つてないで下がつてください」

そのトーレの後方で銀髪の小柄な女性、チングに守られるような形でこちらを見てなにやら呟きながら考察しているのは……なのは達の敵であるスカリエッティさん、その人である。

それにしても、なんかチングの口が悪い気がしたが氣のせいだろうか。

「え、なにこの状況」

キヤロが呟く。

正直、俺にもわかりません。

「あ、あの紫の髪の白衣着た変態っぽいのってもしかしてスカさんですか？」

実はキヤロにはスカリエッティの事はある程度話している。

今までスカさん関係の依頼もあったのだが、それを断るのは何でだと聞かれ危ないからだと、仕方なしに重要なこと意外教えてしまった。

そんな俺とキヤロの一人には、スカリエッティはスカさんという呼称で統一されている。

スカリエッティって言いにくいやね。

それにスカさんの方がなんとなく親しみやすいじゃない。親しんでどうするつて話だが。

「へ、へんたい」

「ふつ」

呆然とするトーレと噴き出すチング。
やつぱりチングの性格がおかしい気がする。

「ほう。スカさんは初めて呼ばれるね。なかなか悪い気はしないよ」

なんか気に入られました。

「さて、君達は一体何者で、何が目的でここまで来たのかな？」

スカさんが問い合わせる。

「お助け戦隊！ タスケンジャー！」

ビシッとポーズを決める。

「…………」

無言でキヤロにボカボカ殴られた。

16話（後書き）

お気に入り1000件行きました。

何か久しぶりに感想がなかつたのですが、
その分、お気に入りと評価ポイントの上がり方が半端ない。
何かあつたのだろうか。

あと、7時ぐらいから記憶がなく、気付いたら11時を過ぎていました。
しかもその時点で千文字しか書いてないといつ。
絶望を味わいました。

さて、スカさんのアジトへとスキマを開いてしまった俺達だが、「先程の転移は実に興味深い現象だったよ。出来れば詳しく調べたいものだね。あ、遠慮せずに飲むといい、別に薬なんか入つていなによ」

なんか食堂っぽいところへ通されてお茶を差し出されていた。ちなみにお茶を入れてくれたのはウーノさんだった。

とても美人でした。

お茶を入れた後、ウーノさんは俺の対面に座るドクターの後ろに控えている。

ウーノの他に先程のトーレとチングクがいる。

さらにクラシックトロもいて、此方を向つむき一や二やしている。
性格……悪そです。

あ、あと、天井から顔だけ出しているセインが怖いです。
見た目的に。

現在稼働中のナンバーズがほととぎしに居た。
ドゥーハは既に管理局に潜り込んでいるのか見当たらない。

スカさんはやけに友好的。

トーレは敵意剥き出しで此方を睨んでいる。
確かトーレって戦闘好きだったよな……見ないよつこいつ。

「何睨んでるんですか。やつちやこありますよ?」

喧嘩売るなや。

「ほつ、子供の癖に中々言つた。だが貴様では相手にならん」「かつちーんときました。私が身体だけ大きい単純そなあなたに負けるわけないじやないですか」

お前も十分単純だが。

亀の甲羅振り回すだけじやねーか。

「ふ、ふふ……面白こと言ひ子供だ。私より強いと思つているとはな」

「事実です」

「ならばトレーニングルームで一戦願おうか?」
「上等です。亀甲縛りの刑に処してやります」

「マイシラ、何一人で盛り上がつねりつてんの?」

「マトキヤ」

「止めないでください。どうやつてこのオバサンを縛つてやるつか考へてるんで」

「それは非常に見た目けど、あんまり問題起つますな。ショークリー ムやらないぞ」

「やめましょひ。無益な争いは何も生み出しません」

「無益な争いしようと思つてた奴が言つセリフじゃない」

つーかトレーレがオバサンつて……。

「トレーレもやめたまえ。彼らは大切な客人だよ?」

「しかし、ドクター……わかりました」

反論しようとしたトーレだがスカさんに一睨みされ引き下がった。

それはともかくとして。

「スカさんに調べたいとか言われても身の危険しか感じないんで勘弁してくださいとしか言いようがない」

「ふむ、残念だね。是非調べてみたいのだが」

「断る」

人体実験しか想像できない。

「では、君がここへ来た目的を教えてくれないかい？」

「知らんがな」

「……どうこういとかな？」

「どうこう」と言わわれても。
偶然としか言いようがない。

「困ってる人はいねえがあ。あ、スカさん。調べるのはマジ勘弁。
そして、眼鏡、テメエーは駄目だ。今ここ」「
よく分からぬがクアットロが駄目だといつのはわかつたよ
「ドクターッ！？」

俺的に分かりやすく説明したつもりなのだが。

「ていうか、何でそこで私が出でくるんですの！？」
「知らんがな」

キャロ、真似すんな。だがグッジョブだ。

「！」のガキ……！」、殺してやりたい

プルプル震えるクアットロ。

「まあ、実際のとこ、何か言わなきゃいけないような気がしただけ
「何一つ理解できないですわ！」
「お前は理解できないんじゃない、理解したくないだけだ」
「つー？ ど、どうこうことですのー？」
「お前は、性格が、悪い」
「余計なお世話です つー！」

クアットロは叫びながら走り去ってしまった。
あ、物陰に隠れてこっち見てた。
無視しとこ。

「面白いがあまり苛めないでやつてくれないかな？」
「まあ、もう満足したからいいけど」

今はね。

あれは苛めたくなる雰囲気を纏つてたからこれからどうなるか分
からないぞ。

「そんな訳でここまで来たんだけど」「そんな訳も何も、先程の説明では良く分からなかつたのだが」「スカさん、今困つてることあるんじゃない？」

俺がそう言うとスカさんは目を見開いて驚いた後、おかしそうに

「くつくつ」と笑いだした。

「そうだね。確かに私は困っている」

困つてんじゃねーよ。

そのせいでこんな状況になっちゃったじゃねーか。
まあ、チenkに会えたのは嬉しいけど。

セインも結構可愛いし、他のナンバーズも稼動したら是非会いたいね。

「最近思うように研究が進まなくてね。どうしたものかと考えていたのだよ」

語りだすスカさん。

話が長くなりそうだったのでチenkを見つめてみた。

やつぱ可愛いわ～。

眼帯とか厨一的オサレだよね。

「…………と、聞いているかい？」

「『めん、全然聞いてない。それより俺にチenkくれない？』
「あげないよ」

くれよ。

「チenkさん、チenkさんや」

「なにか？」

「スカさん好き？」

「嫌いだが？」

「チenk！？」

お、ドクターが驚いてる。

やっぱチンクさん何かおかしいね。

「ぐ、やはりあの時の後遺症か」

何かスカさんが呟いている。

え、何かあつたん？

でも、それがなきや自分が嫌われるはずがないとか言つてるスカさんは引くわ。

あ、作つたときにそういう風にしたわけね。

「あの時つてなに？」

気になつたので訊いてみる。

「いや、半年ほど前なのだが……ある任務中に何者かの襲撃を受けてね。外傷は修理したし、システムもなんら不具合は見つからなかつたのに性格が襲撃前と比べ大きく変わつてしまつたのだよ」

そんなことがあつたのか。

「へえ～、修理ねえ」

「この子達は皆、私の作った戦闘機人。人間ではないのだよ」

聞いてないが、俺が修理といつ言葉に疑問を持つたと思ったのかスカさんが説明してくる。

しかも、ビことなく自慢っぽい雰囲気。

「人間じゃないとかどうでも良いんでチンクくれない？」

「やだよ

くそう。

「その襲撃者って分かってないの？」

「ああ。そのときのメモリーも調べたのだが犯人は全く映つてなかつたよ」

「ふうん」

「見てみるかい？」

「いいの？」

「何か分かるかもしないからね。クアットロ、映像を

未だに物陰に隠れているクアットロに指示するスカさん。

「い、いやですわ！」

俺とキャロを威嚇するクアットロ。

「はあ……困った娘だ。ではウーノ
「はい」

ウーノがなにやら操作して、俺達の前に巨大な画面が現れる。

「その瞬間の映像は短いのだがね。何しろ気付いてからやられるまで一瞬だ」

「へえ～」

それは凄いな。

チンクつて結構強いんだろう？

確か一対一でゼスト倒したんだし。

「では映します」

ウーノがそつと、画面に映像が映し出された。

映像は建物の中を走っているチンクの目線で始まった。

暫く走って進んでもいると、

「なんだ？」

建物全体が大きく揺れた。
足を止め辺りを見回すチンク。

暫くして揺れが収まると再び動き出そうとする。
が、その時、凄まじい音と共に、チンクの近くの壁が吹き飛んだ。

「なっ！？」

驚いてそちらに振り向く。

振り向いた先、自分に向かって物凄い勢いで迫ってくる魔法のようないも。

それを見たチンクは驚きで一瞬止まってしまった。
そこには

「と、まあ、こんなことがあったのだよ」

映像を止め、スカさんが話し出す。
映像の最後、止まってしまった所為で、自分に向かってぐる物体
を避けられなかつたチング。

映像を見終わつたあと、俺はだらだらと冷や汗を流していた。

「……キヤロ」

俺は小声でキヤロに話しかける。

「…………」

キヤロも引きついた顔で頷いた。

チングがおかしくなつた原因。

映像を見た瞬間に分かつてしまつた。

だつて

映像の中で、チング目掛けて迫つてくる攻撃。

それが

召喚されたチヨーンで縛られた、亀の甲羅だつたのだから。

17話（後書き）

悲しい……事件、だつたね。

というわけでチンクさんがおかしい原因があきらかに！？

犯人は一体誰なのか！

……見当もつきませんね。

これはもうミステリー小説家を目指した方がいいかもしれんね。

今日はもう一つの小説と同時更新！

疲れたよ。

やっぱり毎日更新だと推敲が甘くなりますね。
最低限、誤字脱字はないように頑張ります。

あ、総合3000ポイント超えました。
ありがとうございます。

確實に犯人はキャロだ。

他に亀の甲羅振り回すような奴を俺は知らない。

「見ての通り、あの攻撃の影響でチンクの様子がおかしくなつてしまつたのだよ」

スカさんに関わらないようにしてたのに、変な感じに関わつてしまつていた。

キャロの攻撃には相手の精神に何らかの影響を与えてしまつようにな何かがあるのだろうか。

スカさんはさう語る。

「まあ、おかしいと言つても私に対してだけなのだがね。他の娘達に対しても今までとなんら変わらぬ態度でいるようだ」

スカさんだけに？

「私もたまに酷いこと言われますわっ！」

クラットロも？

「どうじゅう」と？

俺はチンクに問いかけた。

「知らん。ただ最近ドクターを見ると弄りたくてしじょうがなくなる

んだ。あとメガネも

「……分かります」

キャロが頷いていた。

まあ、俺も分かるけど。

何か弄り甲斐がありそつだもんない。

「お前がうつったんじゃね？」

「どういづことですか」

殴るな。

「俺にうつすなよ、キャロ菌。はい、バリアはつたー

「バカですか？」

ちょ、強い。

力、強いから。

「何か……知っているのかい？」

俺とキャロのやりとりを見たスカさんが何かに気が付いたように言
う。

「知っていると言えば知っている気がしなくもないし、知らないと言
えば知らないような気がしなくもない」

正直に自分達が犯人ですなんて言えるか！
キャロ

「まあでも……スカさんとメガネにしか被害がないならいいんでな
い？」

「そうですよ。それにその方が笑えます」

「だよな」

「はい」

別にそこまで大きく変わつてゐわけじゃないし。

スカさんとメガネ以外には前のままならそれでいいじゃない。

「だがね……私が嫌われるところからの計画に支障が」

「嫌われると言つても言われたことはやつてくれるんでしょ？」

「まあ、そうだが」

「なら、いいじゃない。お父さんの事、本当は大好きなんだけど反抗期がきちゃつた娘とでも思つておきなよ」

その方が萌えるから。

「ほつ……何故だか胸が高鳴るね」

「そつだろうそつだろう」

「これが……萌えと言う奴かい？」

「そう！　口では嫌いと言つていっても、実はドクター大好きと思つているんですね！」

想像したのかスカさんがちよつとニヤけた。

「心の底から嫌いなんだがな」

チンクエ……。

スカさん落ち込んじゃつたじゃないか。

「てか、スカさん戦闘機人だのなんだの言つ割にはみんなのこと好きだよね」

「当たり前じゃないか。彼女達は私の創り上げた芸術品だよー」 愛

「していないわけがない！」

「親心つてやつですな」

「まさにその通りだよー」

意外と話せるじゃないか、スカさんよ。

「だから早く彼女達の性能を魅せつけてやりたいのだがね。思うよう

に研究が進まなくてそれも出来ない」

「あ、ここで最初の話に戻るんだ」

てか、やっぱ普通じゃないわ。

戦闘機人の性能を魅せつけるってことは戦闘だろ。
確実に六課襲撃の前フリージャン。

「研究が進まないねえ……それはお助け戦隊の管轄外だな」

「荒事専門ですもんね」

「技術とか……無理だろ」

「ぎじゅちゅ……」

「噛んだ」

「噛んでないです」

「噛んだよ。ぎじゅちゅって」

「噛んでないです」

「噛んだってば」

「じゃあ噛んだって事でいいです」

いいですも何も、噛んだだろ。

「お、耳まで赤いぞ。恥ずかしいんじゃん」

「恥ずかしくないです。これは身体が火照ってるだけです」

「幼女が何を火照つてんだよ」

エロか?

発情でもしたか?

恥ずかしいんだろう? ん?

「視線がムカツキます」

「そりや悪いな」

「がぶ」

「ぐあつー」

噛むな!

最近お前噛みつくな变成るんじゃない? ふーふ、ペロペロ……噛、ペロペロはしてなによ。ホントだよ! ー。

「そろそろ話に戻つていいかな?」

スカさんが呆れたよつて此方を見ていた。

「チンクをくれるとこつ話だつたね?」「違うよ」

くそ……。

嫌われてるんだからいいじゃないか。

「どうしたら研究が進むと思つ?」

「俺、テレビとか叩いたら直ると想つたんだが、このままでいいのかな?」

「ふむ……想はざつかな?」

「私もデバイスが調子悪いときに呪いて直したことがあるのぢやない？」

似たもの同士だね、とか呟かないで！

「まあ、仕方ないか。やはり自分の力で解決するとしよう」

最初からそうしてよ。

あ、俺達の方からこいつちに来たんだつけ。

「あ、じゃあもう、お助け出来ないんで帰りますね」「そうかい。また来るといいよ。君達は中々面白い、良い気分転換になつたよ。今なら良いアイデアが浮かびそうだ」「ならば、次に来るときは甘いものを所望する」

お前はいつも変わらんな。

いつまでも変わらないキミでいて……なんて言つか！ 少しは変われ！」

「生憎と私はそういう物には疎くてね。ウーノにでも調べさせておこう」

スカさんも何まともに対応してんすか。

「なら俺はチングクさんを所望する」

「それは駄目だよ」

チツ。

「じゃあセインでもいい

「あ、あたしツスか！？」

天井から顔だけ出して驚いている。

「それも駄目だよ」

「くそ！ ジャあノーヴェカディエチカウェンディでいい！」

「あげないよ」

スカさんのばかやううー。

あ、あと、さつき言った三人も最初からいるぞ？

ただ喋つてないだけで。

何か警戒してゐるのか近づいて来ないし。

「チンクさん、ウチに来ない？」

「ドクターはどうでもいいが姉妹がいるのでな。これから生まれる妹達もいる」

「じゃあドクター以外の皆一緒にいいよ」

「ふむ、それなら」

「チンク！ 何を言つてゐるんだい！？」

「私は嫌ですわ！」

折角チンクが乗り気なのにドクターとメガネに反抗される。

「まあ、いいや。また会いに来るし」

「そうか。何故か私もその……キヤロだつたか？ に親近感がわいてな。また来るといい」

それは亀的な意味ででしょう。

「あ、スカさん」

「なんだい？」

「さつきチンクさんが言つてたこれから生まれる妹つて？」

「ああ、私が作った娘はまだいてね、それが数年以内に稼動するんだよ」

「ほう、娘とな。このむつみさんめ！」

綺麗な女ばっかりつてスカさんも最高評議会もとんでもムツツリだぜ。

「むつみ？」

「そうじやないか。こんな綺麗な顔の女の子達にこんなにピッヂリしたボディースーツ着せてさ」

「ふむ、これは動きやすいからなのだが」

「絶対嘘だね！俺は正直工口い目でしか見れないね！」

俺が言つとトーレとチンク以外のナンバーズが身体を隠すように抱きしめてあとずつたつた。

ぐ、このままじや嫌われるじゃないか。

「スカさん……こんな腰を張つていたなんて……さすがだぜ」

「私は何もしていないのだが」

「まあいい。俺は帰る」

スキマを開く。

「あ、妹達が動き出したら」「元々連絡ちょーだい」

スキマに入る前に通信機の連絡先をスカさんに渡す。

「ふむ、分かった。必ず連絡しよつじやないか

スカさんが頷いたのを見てスキマに入る。

「よろしく！ またな！ 可愛い娘を用意しつけよー。」

「甘いもの用意しつけよ」

言い残してスカさん家を後にした。

1-8話（後書き）

週間ユニークが28000とかマジでやる。

フェイトが仕事休みでエリオのところに行っていると、なのはから情報で知った俺は大至急で一人の元へスキマを開いた。

突然現れた俺とキャロに驚いていた一人。

仕事は休みでエリオに会おうとエリオのもとまで来たフェイトだが、会うことしか考えてなかつたために予定はないらしい。俺は一人を説得し、四人で地球へとやつてきた。

なぜ地球なのか。

それは、俺がキャロ以外の子供と接したことはほとんどなく、子供と遊ぶといつたら“それ”しか思い浮かばなかつたからだ。

「これ、キャロって言うんだけど」「これとはなんですか。失礼にも程があります」「見ての通り生意氣なクソ餓鬼だけど」「クソ餓鬼とはなんですか。まるで駄目な大人な癖に言いますね」「だれがマダオか。

「まあ、君と同じぐらいの年齢だから仲良くしてやつてくれ、エリオ君」

俺は目の前のエリオにキャロを紹介していた。

「あ、あの……宜しくお願ひします」

緊張したよつてキャラ口に話しかけ、手を差し出すエリオ。この前のフェイトのこともあって心配だったが、見た感じ原作に近い素直で良い子に育つていてるようで何よりだ。

キャラは差し出された手を握り、

「仲良くしてやらんでもない」

と、凄い上から田線で言つた。

だといつのに……エリオは握られた手を見て顔を赤くした。

「エ、エリオに初めての友達が……っ」

それを少し離れた位置で見ていたフェイトが口元を手で隠して泣く。

なんて純粋な一人なのでしょう。

僕にはとても真似できない。

「そう言えば……キャラも初めての友達じゃね？」

思いついたことを呟いた。

「べ、別に友達が欲しいとか思つたことないんだからねっー」

無表情でツンツンされた。

「はいはい。あ、エリオ君。キャラのことはバカでもアホでも適當

に呼んでくれればいいよ

「バカでもアホでもないです。お利口さんです」

「お利口とか……笑わせるわ」

「その顔を恐怖で歪ませてやるつが」

「おお、怖い怖い。

「ルシHさん……ドニコドンショウつか?..」

「とても子供とは思えないHリオでした。

「キヤロでここよ」

「キヤロでここですよ」

被つた。

「なんでシコウヘーさんがあいつですか

「お前が自分からそんなこと言ひとは思わなかつたもん……そして、

惚れたな?」

「…………」

「いたつーちゅ、無言ド、殴る、な」

なんだよ……変な口と並んでなーだら。

「で、では……キヤロ、わんで」

これなり呼び捨ては難易度高いみたいだった。

「H、Hリオ……」

フロイトはこつまで感動しているのか。

「と、とりあえず、挨拶も済ませたし、中に、入らない？　あと、キヤロはそろそろ殴るのをやめるべし」

「じゃあ謝つてください」

「な、なにを？」う、うん、ごめん、「冗談」

何か殴る力が増したので謝つておいた。
最近キヤロのことが分かりません。

よつやくキヤロが殴るのをやめてくれたので四人で券を買い、中に入る。

どこのつて……遊園地だよ地球の。
言わせんなよ、恥ずかしい。

遊園地に入つて、ちびっ子二人は田を輝かせて周りを見ていた。

「わ、す、凄い……あ、可愛い」

フロイトも同様だった。

乗り物を見て驚き、着ぐるみを見て可愛いと囁く。

そんな貴方の方が可愛いのですが。
なにこれ、マジでお持ち帰りしたいんですけど。

「キャロにヒリオ君や」

「はい？」

「なんですか？あとヒリオでいいですよ」

じゃあヒリオと呼ませ。

「遊園地に来たからには乗り物は全部乗らないといけません。これは法律で決められています」

「何を適当な……」

キヤロが相変わらず冷めた目で見てくる。

「え、そりなんですか！？」

「そ、そりなんだ……知らなかつた」

それとは正反対に信じて居る一人。

エリオはともかくフロイトが純粹すげて悪いことしてゐる部分になつてゐる。

……やめないけど。

「本当にです。のでドン・ドン乗つてこきましょい」

「そ、それって……ジェットコースターとかも乗らないこと駄目、な
のかな？」

フロイトが恐る恐る訊いてくる。

「当然です。遊園地まで来てジェットコースターに乗らないとか逮
捕されます」

「え、ええっ！？ も、もういい……」

「……怖いの、ですか？」

「は、はー」

「普段、空中を高速で飛びまわっているの」「ですか？」

「あ、あっ……それと『れとせ』、関係ないです」

顔を赤くしてモジモジするハイイト。

「なんですか、この可愛い生き物は」

「お前もそう思つた。天然でこれだから恐ろしいよな

キャロと小声で話しかかって、

「うう……でも逮捕されるのは駄目だし……どうしよう」

すいじい悩んでこらみたいだ。

「ところでここで早速行こう。早くしないと全部乗れなーぞー。」

俺はフリーパスを掲げる。

「キャロー、まぢは何だー!?」

「勿論ジヒットロースターですー。」

「どれだー?」

「一番人気のジラゴンはじうでしょー?」

「良く分かつてゐなー。正解だー!」

ドリゴンヒザイヒアードー一番長いー一番怖いと評判のジヒットロー
スターだ。

最初にこれを選ぶとせ……やせりキャラは侮れんな。

「ヒリオー。」

「は、はい」

「心の準備は万端か！？」

「はい。」

「こいつのは初めてだらう楽しそうなエリオ。

「エ、エリオが楽しそうなのはこいナビ……！」怖いよ

「大丈夫ですフェイトさん」

「しょ、翔兵さん……」

「怖くないようすつと手を握つて……」

「フェイトさん行きましょー！」

俺が言い終わる前にフェイトの手を引いて歩き出すエリオ。

「な……なん、だと……？」

わざと俺の邪魔をしたといつか？

だとしたらエリオ……お前は俺の敵だ。

相当勇気、振り絞ったのに。

俺が打ちひしがれていると肩をポンッと叩かれた。

振り返ると、そこにはキヤロ。

「負け犬乙」

今の俺は怒りで人を殺せるぞ。

「私達もさつあと行きますよ」

キヤロに手を引かれ、フェイトとエリオの後を追うのだった。

19話（後書き）

親子か！

熱出るわ、弱ってたせいがサバ食つたらジンマシン出るわで大変でした。

とりあえず治つたんで更新。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269t/>

リリカルチート物語

2011年6月21日00時12分発行